慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	長安時代の柳宗元について
Sub Title	The life and thought of Liu Tsung-yüan (柳宗元) in Chang-an (長安)
Author	太田, 次男(Ota Tsugio)
Publisher	慶應義塾大学附属研究所斯道文庫
Publication year	1963
Jtitle	斯道文庫論集 (Bulletin of the Shidô Bunko Institute). No.2 (1963. 3) ,p.99- 169
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00106199-00000002-0099

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

長安時代の柳宗元について

太田次男

序

われわれが韓柳と併称するとき、古文家としての二氏を想起するのが普通である。そのうち、韓愈については、特に宋代以来、「原道」を中心として、新儒教の譜系と関連させつつ、思想的考察も加えられてきたが、後者の柳宗元については、「韓門の罪人」[1]という評価が示すように、伝統的儒学の側からは、多くの思想が混入されているためか、寧ろ厳しい批判が下され、その影響は永く学界をも支配して、これまで、思想的研究の対象にされることは極めて稀なことであった。

これに対して、新中国の学問的傾向は、白居易の「諷諭詩」などと共に、永州時代の柳宗元にみられる、いわば革新的側面に注目するに至り、これらに再評価を加えて、新しい官人像を樹立してきたが、わが国に於ても、このような新しい動向に呼応して、唐代に於ける政治、社会、経済的分析をふまえた、柳宗元に対する、文学以外の分野に於ける新しい認識と、これに伴う研究が、漸く緒につくようになった。[2]

これらの文人たちは、いうまでもなく、基本的には政治、社会と深く関連する官僚に立場をもち、筆者もこの見地から、韓愈を論じたことがあるが、[3] 従来ややもすれば、文学的研究と歴史的研究との間には積極的な意味をもつ共通の場がなく、前者は史的背景の検討に消極的であるか、または受動的にとどまるかであり、また後者は作者の内部に入ることに、とかく躊躇しがちのようである。その意味では、ウェーリーが白居易伝を書くに当って、[4] 記述の基礎を作品そのものに置き、確実な伝記の資料は公的記述の中から得られるよりも、著者の文集の中から得られる方が信頼できる、といっているのは、よしんば、実際の研究操作に当っては、多くの困難な問題を内包してはいるにしても、なお、示唆に富む言葉であるといえよう。特に、早く流謫されて、再び中央政界に復帰することのなかった宗元のように、正史的史料に比較的乏しく、また同時代の人々の文中にも一種の政治犯的扱いからか、触れられることに躊躇されている実情からみれば、このことは実際問題としても極めて切実なのである。

宗元に関する、新中国に於ける研究成果の多くは、当然のことながら、政治、社会的側面から始められている。永州、柳州に於ける十数年に亘る流謫の生活にも拘わらず、ついに隠遁思想に停迷することなく、個人的悲しみの感情を乗り超えて、よく政治家としての自覚を終始持続した宗元にとって、これは、方法的にみても決して無理ではないが、その場合、政治的人間として規定するにしても、もう少し多面的に考察される必要があろうし、また、同じ永州時代といっても、時期的変化について、もう少し精細に検討する必要があるようである。

例えば、家系のことについては、これまで知られている、史的事実以上の考察は加えられていないが、河東の柳氏や、最初の夫人である弘農の楊氏など、いずれも名族であることは周知の通りであり、かつ、その文集中に於ても、実に屢々誇高い柳氏のかっての栄光に言及しているのである。それ程までに家系を常に意識に入れている者が、寒族

出身の王叔文一派と結ぶに至ったことは、極めて興味深いことであり――勿論こういう事例は、柳宗元のみの特殊現象ではなく、例えば牛李二派の対立の如きも、確然たる出自による区別にはなっていないが――また晩年には、門閥派の李吉甫と文通している事実を認めることもできるが、こういう多面性と、内面の複雑な動きとを無視した階層的一面的区別観は、結局人間的彫りの深さを、強いて、単純な図式主義に陥らせることになりはしないであろうか。

宋代の政治改革者としての王安石は、王叔文に加担したいわゆる八司馬を「天下の奇材」(5)と評しながら、王叔文に誘われたことを前提にして、一党の動きを「不義」と断定せざるをえなかった。この変に対する新中国に於ける再評価は、いわば、従来の宋学的呪縛からの解放を意味するものとして、高く評価されなくてはならないであろうが、人民のためといい、革新的と決定づけるには、なお若干躊躇せざるを得ないのである。その前に先ず、客観的に、当時の政治的、社会階層的分析を加えて、絶対的権力が確立をみないままに、如何なる政治的諸勢力が相対的関係に於て内部的には相互に奇妙な交流をなしつつ、対峙していたかをみるべきであろうし、そういう内部分裂の危機に直面しながら一種の妥協と、わずかに見られる均衡の中に、王叔文一派の動きを見出すとき、はじめてその改革の可能性と存在意義も明かになり、また宗元が一貫して信奉する合理的思想も、よりよく理解されるのではなかろうか。政治的に相対的対立関係のみられるとき、かつての権力の背後にひそむ非合理的要素を剝脱する合理的主張こそ、その相対主義を脱却する一つの途であり、それはまた有力な思想的武器でもあったのである。

現実をそのまま肯定し、それ故に、ともすれば妥協に終始するというタイプを排し、あく迄も原理に純粋であろうとする柳宗元にとっては、不正や不義に対する怒りや悲しみの振幅も大きかったし、それは同時に、時として自分を深く激しい自省に向けもする。王叔文との政治改革運動についても、本質的にはこれを正当と信じつつ、尚、劉禹錫

に対して、時として「書を信じ、自から誤と成る、事を経て漸く非を知る」[7]ともらし、また内部に動いて止まない、正しいものに向って直進するという、一種の危険因子を自から認めては「宥蝮蛇文」というような、自戒とも自嘲ともとれる複雑な心理を表白せざるを得なかった。

その出自からいえば、門閥派に近ずいて何の不思議もない宗元が、寧ろその痛烈な批判者ともなり、また経書に拠りつつも、一方では自由な批判的立場を求め、既に青年期に於て、仏教にもある程度の関心を示し、更に老子に近ずくなど、これを韓愈の、一貫して儒教を信奉し、他の思想に対しては終始攻撃的態度をもって臨んだものと比較すれば、思想的に弾力性に豊んでいることは明らかであるが、政治家の節操は堅持しつつ、思想家、文人としての豊かさとを併せもつ宗元が、生涯の各時期に於て、どのような体験を重ねてゆくかをその順序に従って、改めて見直してゆくことは、いまの研究段階に於ても、必ずしも無駄であるとはいえまい。生涯全体を巨視的に眺め、その全体験を適確に把握することなしに、特殊な問題を取扱うとすれば、ややもすれば、視野が狭められることもありうるのである。[8]

その意味に於て、ここでは従来の研究の補足と整理を兼ねるものとして、宗元の生涯を単なる伝記にとどめず、その生き方を時代との関連に於て、描こうとし、主として作品に即して、勉めてその内部に入りつつ、まとめようと試みるのである。その生涯を便宜的に一、長安時代。二、永州時代。三、柳州時代。と三期に分けるが、今回はその長安時代に該当するわけである。永州、柳州時代はこれに引続いて発表される予定である。

註

(1)欧陽脩『集古録跋尾』巻八

「自唐以来言文章者惟韓柳柳豈韓子之徒哉真韓門之罪人也蓋世俗不知其所学之非第以当時輩流言之爾今余又多録其文懼益後人之惑也故書以見余意」(唐南嶽弥陁和尚碑)と批判的である。

(2)史的評価には、陳寅恪『唐代政治史述論稿』、韓国磐『隋唐五代史綱』、黄雲眉『韓愈柳宗元文学評価』などがある。
(3)「韓愈についての一考察」(斯道文庫論集第一輯)　(4)ウェーリー著、花房英樹訳『白楽天』(THE LIFE AND TIMES OF PO CHÜ-I)　(5)(6)読柳宗元伝(『臨川集』巻十七)　(7)三贈劉員外(巻四二)
(8)清水茂氏は「柳宗元の生活体験とその山水記」(中国文学報第二冊)に於て、山水記を、永州に於ける政治的体験と関連せしめつつ論じ、これに対し筧文生氏は「柳宗元詩考」(中国文学報第十六冊)に於て「清水茂氏は、柳宗元が山水記を著わした動機は、単に政敵たちの視線の及ばない対象に怒りの感情、悲しみの感情、抑鬱された感情を移しかえるためばかりでなく、彼自身の生活の反映でもあった、つまり自分と同じく不当に軽蔑され見棄てられた永州の山水のために「記」を書いてやったのであると説かれている。しかし詩ではもはやそのようなゆとりは殆んど見られないといってよい。」と述べ、詩と文との内容に若干喰違いのあることを指摘しているが、これなども、その時期、及びその生活体験の実内容について、更に一段と検討する余地のあることを示しているようである。尚、これについては、永州時代に於て考究するつもりである。

尚、テキストは、『柳河東集』(世綵堂本)中華書局印に拠った。

一

人の生涯に於ける転機には、内部的なものと、外部的要因とに分けられようが、内的な変化は見極めにくく、ややもすれば明かに眼に映ずるものに頼ろうとしがちである。

いま、柳宗元や韓愈などという文人を、その立場を官人としてみようとすれば、内的な必然性は後退して隠れ、常に、政治的事件というような、他律的な力に身を委ねているかの感を受けるのである。勿論、例えば王叔文の事件に参加するか否か、などということは、あくまで最終的には、個人の自由意志によるものであり、その意味で彼等の自主性はいささかも侵害されてはいない。ただ、流謫以前を一応長安時代というとすれば、王叔文の事件という外部的

指標によって、この時期が区切られるのが普通で、この点は、次の永州、柳州時代という場合も同じである。

これは一応、やむを得ないとしても、この長安時代というものを、内面的に考察しようとすれば、外部で自明な区分であるかに見えることが、それに呼応して、それ程明瞭な変化として表われていないことに気づくのである。長安から永州に移れば、確かに官職を始めとして、環境はすべて一変する。それにも拘らず、内面を辿ってみるとき、直ちに、それ程本質的な変化はみられず、三十三歳流謫の後、少なくとも三年間、つまり三十六歳までは永州の現実に立脚しての立言というよりも、寧ろ長安時代の延長とみなす方が適当のように思われる。これは宗元自身として、王叔文の事件を本質的には、いささかも否定していないことによる点が多いのであろうが、長安時代という便宜的な言葉を使用する場合、こういう限定を予め認める必要があるのである。また、これと関連して、資料操作のことになるが、原則的にいえば、長安時代の宗元は、厳密に長安時代のものと確定できる資料のみを使用すべきかも知れないが、ここでは、永州や柳州にあって長安の頃を顧みたものや、思想的に特に時代的区別をつける必要のないものは、そのまま使用することにした。

宗元の場合、便宜的に区分された三期の中で、作品の質と量とからみて、第二期の永州時代に重点が置かれるのがこれまでの普通の扱い方であり、文人としてみれば、それは一応当然かも知れない。しかし、官人柳宗元は寧ろ長安時代こそ現実の政治的渦中にあって、最も活動的な時期であり、それぞれの時期に、評価の上で単純な差別はつけ難いのである。永州時代の作品といっても、流謫という政治的理由と、それに対する独自な対処の仕方だけから生れてきたのではなく、それと深く結びつき、連続している、第一期の長安時代の改革的意欲と、学問的蓄積を必要とするし、それを無視して、永州時代のみを重視するのでは、極めて不充分な考察になるのを免れないであろう。永州以前

も、決して単なる準備の時期とはいえないし、筆者は寧ろ官人としての柳宗元の生涯は、長安時代こそ、その頂点であり、それが一生を決定づけているという見方に立つのである。

初期の韓愈は政治的には極めて不遇であった。しかし、むしろその不遇こそ、文学的開花の力源となっているようである。博学宏辞科受験をめぐる宰相に対する三上書から始まって、「大凡物その平らかなるを得ざるときは、則ち鳴る」を冒頭におく、その文学論ともいうべき、「孟東野を送る序」が結実するまでは、地方にあって、つねに中央に於ける官職を望みつつ、しかも、その実現をみないままに、内心は不満でたぎっていた。そして、その失意の政治生活は、個人的生活の凝視にすべてを集中させたのである。その意味で、韓愈に於ける文学論の形成は、公的政治生活の反映であるともいえるのである。

これに較べれば、永州以前の柳宗元は比較的順調であったといえる。当時の政治的、社会的環境については、既に韓愈を述べる際に触れたし、さらに後章で詳述するが、出生に於て五年の差をもって出発した、両者の官人としての生活環境には著しい相違があった。河東の柳氏に出自をもち、現在は必ずしも振わないが、父鎮は晩年侍御史として徳宗の信任も厚く、宗元が二十一歳進士科に及第するまで、ともに生活することができた。韓愈が三歳にして父を失ったのとは少、青年期の精神生活の出発と形成に於て、対照的である。その上、柳氏の家庭環境もすぐれた母盧氏を中心にして、高い教養と品位のあるものであった。この家庭内に成長し、二十六歳には既に、博学宏辞科に及第することができ、中央の官界に入ることになった。

韓愈が二十九歳に至って遂に受験を断念し、宣武軍に職をうべく、汴州に赴いてから卅五歳まで、終始不満のうちに地方にあったのに反して、宗元は「吾れ京師に長じて三十三年」(1)と自からいうように、少年期から卅三歳の王叔父

の事件による失脚まで、大部分を長安で送り、任官後は将来を約束された、中央に於ける官人の一員として、政治を外からではなく、直接これに携わる意味で、内部からこれを批判することができる立場に立つことになった。外部からする政治批判は一見極めて痛烈であり、また確かにはなばなしくもみえようが、ややもすれば、それは抽象論や一種の理想論にとどまることが多い。遂に政治家としての安定した地歩を築き得なかった、孟子にみられるそういう傾向は、やがて同じく局外者の立場にある韓愈をこれに近づけしめた。これに反して、内部からの批判は着実であり、理想をもちつつ、現実に足場をもつのである。これが長安時代の宗元の仕事を、文学的には目立たないものにしているが、政治家としての柳宗元は、全力をこの期に傾注していることを知るのである。後述するように、永州時代に書かれた批判的文章も、着想はこの時期に既にでき上り、それがたまたま永州に於て書かれたと思われるものも多いのである。従って、それは純粋に永州時代の作とはいえず、いわば長安時代の延長とみなすのが至当であろう。

この頃の文は、方包が指摘するまでもなく、(2) 確かに引用が極めて多く、なかには引用文によって、全編が構成されているかにみえるものすらある。しかし年少期に引用が多く、年とともに次第にそれが減少するという傾向はみられない。つまり、それは始から意識的であり、対象の性質により、引用の多少と、引用原典も選択されていることを知るのである。完璧というには無論程遠いが、古典の引用や、それをふまえての立言が、単なる未熟を意味するものではなく、精選された古典の引用によって、古典によりつつも、それとは別の新しい世界が再構成されようとするのである。特に政治、法制的引用の態度にそれは色濃くみられ、そこに宗元の生々とした政治生活の息吹きを感ずることができるのである。かつて、失意の韋生に対して「内に植うるを楽しみ、外に揚ぐるを欲せ」(3) ざる態度を「其の志非なり」と断じて、これを政治生活に引きもどすべく激励したが、公的な政治生活にわが生が大きく開かれていると

き、内なる自己を深くみつめるという傾向が、同時に強まることは普通みられない。その意味で、長安時代に一篇の文学論も生れなかったことは、むしろ当然の成行であろう。当時の宗元にとっては、文人たらんよりは、政治家たらんとすることの方が、遙かに重大であったのである。

韓愈の文に従えば、宗元は若くして「精敏にして通達せざるはなく」また「少年と雖も已に自から老成」していたし、また議論に当っては「今古を証拠として経史百子に出入」[4]したとある。また自から述べるところによれば「年少にして事を好み、進んでは止まる能わず」[5]ともあるが、この新進気鋭の宗元に「数十百人」[6]の友が集まり、また「往京都に在りて、後学の士僕の門に到る、日に或いは数十人」[7]と、後進の者もこれを慕って集まってきたことも、極めて自然のことであろう。これらの朋友の中から、後に王叔文一党のときの同志も出ているが、これは王叔文との間を考えるとき、一種の資料を提供することになるのである。

遺憾ながら、宗元のこの期に於ける詩は殆んど残っていないので、その個人生活に於ける感情の直接的表現や、いわば身辺の雑事というようなものは、仲々知ることはできないが、その文に於ても、例えば韓愈の「張籍に答うる書」や「李愿の盤谷に帰るを送る序」などにみられるような、永年に亘る不遇による生活的疲労感は、藍田県尉の頃を除けば、殆んどみることができないのである。宗元は昂然として「僕の文を為るや久し、然れども心之に少なくして務めざる也、以為えらく是れ特に博弈の雄耳と、故に長安に在るの時は是を以て名誉を取らず、意之を事実に施さんと欲す」[8]と明言しているように、個人的性癖の強い文人としてよりも、意気甚だ盛んな少壮官人柳宗元としての側面が、純粋なかたちで、全面に表出されているのが、この長安時代であるということができるであろう。

註

(1)送賈山人南遊序（巻二十五）　(2)書柳文後（方望溪全集・巻五）　(3)送韋七秀才下第求益友序（巻二十三）　(4)柳子厚墓誌銘（昌黎先生集巻三十二）　(5)(6)与楊誨之第二書（巻三十三）　(7)報袁君陳秀才避師名書（巻三十四）　(8)答呉武陵論非国語書（巻三十一）

二

いま河東の柳氏について、改めて史的考証を重ねようとするつもりはない。ただここでは、宗元自身、門閥としてのわが柳氏をどのように受け容れ、それが内部でどう作用しているかをみ、さらに、寒族出身の王叔文一党といかに結びつくかの、内的動機をみようとするのである。

貞元二十一年、友人独孤申叔が河東に往くのを送るに当って、宗元は「河東は古の吾が土也」[1]と親しく呼びかけている。しかし実際には「家世遷徙し、就て緒ぬる能わず」というように、そこはまだ見ぬ土地であったが「其の間大河条山有り、気は関左を蓋う、文士往往彷徉臨望す」と聞くにつけても、「懐いを旧都に奮うこと、日に以て滋甚なり」と、祖先の地を懐うこと切なるものがあった。

柳氏と河東との関係については、註[2]によれば、

魯孝公子伯展。展孫司空無駭。無駭生禽字季。為魯士師。食邑柳下。謚日恵。因以柳為氏。魯為楚滅。柳氏入楚楚為秦滅。乃遷晋之解県。後秦置河東郡。故為河東解県人。

とあり、宗元自からも「柳氏黄帝より周魯に稷降し、字を以て族を命じ、地に因りて氏を受く、載せて左氏内外伝及び太史公の書に在り」[3]といい、また「禽氏食菜を以て柳姓と為す」[4]と、その来歴を述べている。そして「厥の後昌大

世河東に家す[5]」といい、さらに「卓より公(渾)に至る、十有一代、士林の盛族として、南朝歴代の史、及び柳氏家諜に著し[6]」や「吾の先魏より已来、宰相たる者世を累ぬ[7]」などと、祖先の偉業を顕彰してやまないのである。

しかし、過去の栄光を追うのではなく、現在を直視すれば、なる程「吾族の大にして、尊長の多[8]」いことに於ては昔も今も変りなかったであろうし、これは宗元による一族の墓誌銘が数多いことによっても知られるが、これを当代の政治的、社会的環境の中に置いてみれば、「柳氏の唐に至りて、その著われしは中書令諱奭、中書の弟の子、徐州の府君諱は某(子夏)と曰い、実に孝徳有りて、其の家業を世にす、清池府君諱某(従裕)、之を継ぐに茂実を以てし、徳清府君諱某(察躬)之を承くるに善政を以てし、以て侍御史府君諱某(鎮)に至る。貞信勁正を用て邦家に達す[9]」と父の代までを述べているように、最早名族としての柳氏を誇示しようとする点はみられないし、またかっての栄光にふさわしい上層に位置する者も見当らないのである。ここで宗元が指摘し、また誇りとして感じていることは寧ろ名族としてというよりも、ここに述べられた人が、いずれも政治的に誠実であり、道義的にもすぐれているという点にある。李氏出身の伯祖妣について「夫人良族に生れ、嶷然として殊異[10]」といい、また陸氏出の叔妣について「陸氏は呉郡に家す蓋し江左の上族[11]」ともいうように、門閥として著名であるという一般的事実を、勿論否定はしないけれども、それ以上に、政治的側面に注目しつつも、一個の人間としての価値いかんに重点を置くのである。柳下恵に対して「吾が祖士師[12]」と呼びかけ「祖訓を遵ぶ」といったのも、世の儀表となっていた下恵に対する、わが祖として、また一個の優れた人間に対する追慕の念の表出ということができようし、また「人咸吾が宗の宜しく碩大なるべしと言う、積徳あればなりと[13]」も、主としてこの点を強調しているのであるし、更に「文雅を以て前代に高し[14]」をも加えれば、まさに士大夫の典型をその祖達にみようとしているかに見えるのである。同時に、この柳氏の一族と

しての意識はいささかも薄れているわけではなく、「柳氏」「吾が族」「吾が宗族」を始めとして「宗党」「宗門」「宗人」「宗戚」というような言葉が随所に使用されているのをみることができる。

とはいえ、一族の墓誌銘のいずれをみても、韓愈がかって「殿中少監馬君墓誌」に於て描いた、馬燧のような、スケールの大きい、上族にふさわしい人物を見出すことはできない。その多くは、「敦柔峻清」[15]や「孤厲貞方」[16]や、「游刃立断」[17]などにみられるように、その能力を充分に発揮しないままに終ったような、いわば特異な個性をもつ官人像であることが多く、この柳氏の一族が門閥派の一員として、政治的に重きをなすようなことは、「吾が門の凋喪、歳月已に久し」[18]という嘆きをまつまでもなく、最早不可能であったし、一族を率い、複雑怪奇な政界の主導権を握ろうとするような人物も見当らないのである。個々の人物をとってみれば、それぞれ特異な個性が鮮明であり、その意味では依然として「士林の盛族」たるに恥じないけれども、柳氏一族としての政治的、社会上の力は、最早大勢に多くの影響を与えてはいないのである。

父鎮の弟、つまり宗元にとっては叔父に当る人物が、殿中侍御史まで進み、一族の輿望を一身に担って「四徳を兼備し、体に具にして微なり」[19]といわれていたが、その死を悼んだ宗元は「小子常に兄弟無きを以て、その睦を朋友に移し、少くして孤なれば、其の孝を叔父に移す。天将に我を窮せしめ、其の志を奪う。故に罔極の痛仍に集まる。朴魯甚だ駭にして、文字にする能わず」と、悲嘆せざるをえなかった。父の死は宗元廿一歳のときであり、叔父の死はそのわずか三年後ではあったが、父なき後の両者の内的結合の深さはよく示されている。その叔父が「祖を忘れず」に、始めて祖碑を作ったとあり、その内容は伝えられないが、宗元は「以て広大の志を紀さんとす」とその意図を明かにしている。両者の関係からみて、それは叔父の志であると同時に、その遺志は必ずや宗元をも深く期するところ

あらしめたに相違ない。

永州以後に於ては、柳氏の凋落を悲嘆する言葉が屢々みられるのに対し、この期に於ては、内心はともかくとして、実際の文字として、そういう感慨の表現は殆んど見当らない。永州以後は、その挫折を含めて、柳氏の前途に対する暗澹たる気持が、そうさせたのであろうが、ここでは、並々ならない自信と前途への光明が、現実にみられる柳氏の実情を幾分軽く考えさせたものと思われるし、さらに、柳氏に触れること自体が一種の野心の表明でもあった。

「聡明絶人」[19]といわれ、「秀気孤稟」[20]と嘆称され、また「天姿秀異」[21]とうたわれた家元が、若年の頃「金の宝たるや下流に居るを恥ず……然れば則ち成器の珍を抱いては、必ず将に待つ有らんとす」[22]と、黄金にわが抱負を比せしめる程の自負心をもっていたが、廿六歳博学宏辞科に及第とともに、集賢殿正字として正式に中央の官職を得るにいたった。韓愈は当時のことを回想して「名声大いに振い、一時皆慕いて之と交わらんとし、諸公要人争いて我が門下に出でしめんと欲す」[23]と述べているが、この新進気鋭の秀才を一門の勢力下に入れようとする動きがうかがえる。

後に説くように、当時は門閥派、進士出身者、宦官というような諸勢力が互に入り乱れて、基礎の安定しない専制君主の下に抗争を続けていたが、「賢者をして上に居らしめ、不肖者をして下に居らしむ」[24]や「賢を用い愚を棄つ」[25]というような自明の理がそのまま行われず、「世を継ぎて理むる者、上果して賢なるか」と、上層に対する疑念のみ多い政界に於ける日常に於ける体験は、門閥出身ということが、この期に於ては、門閥意識として動くことなく、また実際にも、宗元を門閥あるいは、上層よりの誘いに乗らしめずに、寧ろ、すぐれた士を数多く輩出せしめた盛族の一員として、「広大の志」を継ごうとする、柳氏に対する一種の使命感と自負心となり、それは更に進んで、後にも説くように、名を求める欲求ともなって、現実政治に対する、改革的方向に向わしめたと思われるのである。まさしく

「家に由りて邦国に達す」[26]という言葉こそ、宗元の内心の吐露であったと思われる。

註

（1）送独申叔侍親往河東序巻（巻二十二）　（2）（3）故銀青光禄大夫右散騎常侍軽車都尉宜城県開国伯柳公行状（巻八）（4）（5）故叔父殿中侍御史府君墓版文（巻十二）　（6）（2）に同じ　（7）潞州兵馬曹柳君墓誌（巻外集補遺）　（8）亡姉崔氏夫人墓誌蓋石文（巻十三）　（9）亡姉前京兆参軍裴君夫人墓誌（巻十三）　（10）伯祖妣趙郡李夫人墓誌銘（巻十三）　（11）叔妣呉郡陸氏夫人誌文（巻十三）　（12）送従兄偁罷選帰江淮詩序（巻二十四）　（13）送澥序（巻二十四）（14）送文郁師序（巻二十五）　（15）（17）故殿中侍御史柳公墓表（巻十二）　（16）（19）故叔父殿中侍御史府君墓版文（巻十二）　（18）祭弟宗直文（巻四十一）　（19）劉禹錫「祭柳員外文」（劉夢得外集・巻十）　（20）皇甫湜「祭柳柳州文」（全唐文・巻六百八十七）　（21）崔羣「祭柳州柳員外文」（全唐文・巻六百十二）　（22）披沙揀金賦（外集巻上）　（23）韓愈「柳子厚墓誌銘」　（24）封建論（巻三）　（25）全義県復北門記（巻二十六）　（26）裴墐崇豊二陵集礼後序（巻二十一）

三

ここでは、家庭環境、師、友など、宗元の人間形成に内面的に大きな影響を与えている面を取り上げ、後年の思想的発展の萠芽がどの程度、ここで養われたかをみようとするのである。

最初に家族を中心とした年譜を略述すれば、

四歳（大歴十一年）父、呉に赴任し、母らと共に長安に留どまる。

一九歳（貞元七年）妻、楊氏を娶る。

廿一歳（貞元九年）父卒す（五十五歳）。宗元、進士科に及第。

廿四歳（貞元十二年）叔父卒す。
廿六歳（貞元十四年）宗元、博学宏辞科に及第。
廿七歳（貞元十五年）妻、楊氏歿す（二十三歳）
廿八歳（貞元十六年）姉、裴堽夫人歿す（三十歳）
卅一歳（貞元十九年）姉、崔簡夫人歿す。
卅四歳（元和元年）母、盧氏、永州に歿す（六十八歳）

ということになり、永州に於て歿した母を除けば、親しい家族はすべて長安時代に失っているのである。父の死後「天弊族に禍し、夙に大故に遭う、我が諸孤太夫人の養を奉じて、敢て死を図らず、常に復するに至る」[1]とあるのをみれば、母盧氏を中心とした家庭生活が永州まで続き、従って母の影響は有形無形あらゆる面で極めて深いことを知るのである。そして、母の死後やや経った元和四、五年には「老農の女」[2]と再婚し、やがて子供も生れるので、永州時代以後の家庭環境は、すべての点で、長安時代とは大きく変るわけである。

父について宗元は「貞信勁正」「純深の行端直の徳」「憲章粛清」[3]などと評しているが、侍御史を拝したときの制書に「守正為心、疾悪不懼」[4]とあり、また宗元が進士に及第した際、徳宗はその父が朝士の鎮であることを聞いても、それが嘗て姦臣竇参に抗した者であるだけに、「吾れ其の子の為に挙を求めざるを知る」[5]といったといわれるのをみても、客観的評価と合致しているようである。確かに「先君独り抗するに理を以てす」[6]にも示されるように、普通の官人が敢て争わないような上への反対にも、敢て身をもってこれに当るという「正を守る」姿勢は、その生涯に一貫していたのである。

その道は「詩の羣、書の政、易の直方大、春秋の懲勧に得」[7]といわれ、一時、乱を避けて王屋山に隠れたときにも一族を集めて春秋左氏、易王氏を講じ、「衎衎として倦まず、以て其の憂を忘」[8]れる有様であったので、その母徳清君も易の言葉になぞらえて、「茲をこそ遯世無悶と謂わん」[9]と喜んだとあるのによっても、その父と家庭環境の一端を知ることができようし、徳清君の喪にいて「哀に過ぐる有れども、礼を逾えず」[10]という態度は、その儒教的教養人の一典型を知るに充分であろう。

宗元は屢々誇らしげに柳氏の名声について「士の家風を称する者これに帰す」[11]といい、またその「孝仁の誉、他門よりも高し」[12]と述べているが、そういう家風は勿論、伝統的なものであろうが、また母盧氏によるところが多いようである。「実に全徳有りて、九族の宗師たり」[13]は必ずしも過評ではあるまい。七歳で毛詩及び劉氏烈女伝（劉向によれば「向以為王教由内及外、自近者始賢妃貞婦興国顕家干法則、及序次為烈女伝」とあり、当時の教育の一般的傾向が示される。）に通じ、また夫が読む旧史や諸子の書を側にいて尽く知ることのできた母は、幼少の宗元に古賦十四首を書によらず、口授することは極めて容易であったであろう。そういう教養をよく身に体し、「柔明勤倹」[14]をもってその志を行ったとあるが、舅姑にもよく事え、姻族にもゆきとどいた交際をし生活の苦しい時には、「自からは足らずして、孤幼には飽かしむ」[15]という程であったともいう。そして思想的にその基本的態度は「己より尊き者には、之を敬すること臣の君に事えるが如く、己より下なる者には、之を悲れむこと母の子を畜する如く、己に敵する者には、之を友とすること、兄弟の如くし、志を得ざる者無からしむる也」[16]によって明らかであろう。永州流謫に当っては「汝唯憲度に恭ならず、既に戻を獲たり、今将に大いに後を儆しめ以て前悪を蓋い、敬懼するのみ、苟も能く是のごとくならば、吾れ何をか恨みん哉、明者は往事を悼まず、吾れ未だ嘗て戚戚たること有らざる也」[17]といって、南方遙か永州にまで同行したが、そこでも「奉侍するに温清にして未だ嘗て憂を見」[18]

ない有様であったという。

このように、両親を中心にして、儒教的教養が家庭内にゆきわたっていたとはいえ、必ずしも厳格そのものであるのではなく、姉への態度として「威怒の教無し」[19]といわれ、その姉も「以て家婦介婦に睦び、必ず敬必ず親、下以て其の赤子の心を失わず」[20]とあるし、もう一人の姉も芸術的に多芸であったことも、それを証するに足りるであろう。[21]

これを要するに、宗元の家庭環境には儒教を批判したり、否定するような要因は何等見当らず、それどころか「振振たり吾が宗、徳の宅なるか」[22]によっても知られるように、よい意味に於ける儒教的教養がそのすみずみにまでゆき渡っていたということができるし、しかも宗元もその中に教育せられて、寧ろそれを当然のものとして受容し、自からのものにしているのであって、こういう家風や両親を批判するような態度は勿論みることができず、自からも積極的にこれを肯定し、寧ろ誇示すらするのである。それゆえ、宗元の中に合理的思考法が形成され、政治に対する痛烈な批判的態度が具現されているとしても、それは当時としては当然のことながら、特に儒教以外の新しい思想によるのではなく、父鎮などにも幾分体現された、本来儒教が本質的に内蔵している合理的側面が、新しい時代の中にあって、新たな装いを以て再構成されて、不合理な現実に対する批判として、提出されるようになったものとみるべきであろう。この点はさらに、宗元の現実的政治事務の実践の中に於て、一層明らかに示されるであろう。

宗元の人間形成期に於いて、影響を与えたものは、勿論、単に家庭にとどまるものではない。ここでは、強固ではあるが、いわば儒教的教養の基礎が植付けられたに過ぎない。それ故、次に友人や師についても触れておこう。

韓愈の作になる碣や墓誌、祭文などには、時の大家顕官やその関係者のものがかなり多数を占めている。この中には、自からの意志によるというよりも、特にその晩年は、職掌上やむなく引受けたものも多いと思われるが、それに

比べて、これ亦、罪せられて早く中央を去ったことによるのであろうが、宗元にはそういう種類のものは殆んどなく一族関係や友人のものが多くを占めている点で、極めて対照的であり、また、そこに大きな特徴がある。

しかも、例えば独孤申叔や李中丞に対するもののように、一個の友人としてというよりも、故人をも含めた一つの集団の中の一員としての姿勢をもって、祭文や碣が書かれているものがある点、極めて注目すべきである。

「祭李中丞文」（貞元二十年）をみると、年月日の直後に、既に故人になっている王播を筆頭に、穆質、馮遜、韓泰范伝正、劉禹錫、柳宗元、李程の名前が、その官職名とともに列記され、次いで故人の行実が何の修飾、抑揚もなく、ありのままに述べられている。この種の文に於て、宗元は韓愈に比して、文学的であるよりも、史的事実を羅列し、直敍する点に特徴があり、それ故、やや光彩に乏しいと思われる節もあるが、いまこの祭文をみると、その点が一層甚しく、先ず冒頭に七人の友人の名が出、次でその行実がくるという書き方が、いかにも直接的であり、友人間の結合の強さが表面にうち出され、その密接さが、生々しく感ぜられるのである。

その点、「亡友故秘書省校書郎独孤君墓碣」（巻十一）もほぼ同じであるが、ここでは独孤申叔本人のことが先ず述べられ、次いで「君短命にして、道を行うの日未だ久しからず、故に其の道は其の友に信ぜらるるも、未だ天下に信ぜられず、今其の君を知る者を墓に記す」として、韓泰、李行純、李行敏、柳宗元、崔広略、韓愈、王涯、呂温、崔羣、劉禹錫、李景俭、厳休復、韋詞という十三人の名が、その官職をも附せずに、出身地とともに列挙されているのである。そしてここには、やがて独孤申叔という名は忘れられるかも知れないが、われわれここに名を記した友だけは、永久にその名を忘れることがないという、故人に対する愛惜の情と、道に対する新たなる決意がこめられている。これは貞元十八年、三十歳のとき、藍田尉時代の作であるが、官職もつけられていない点に、形式を無視して、謂わ

ばなすあらんとする、若々しい青年期の情熱を感ずることができるのである。若い時代の宗元の文章には、古典からの直接的引用や、あるいはそれをふまえての文章が多いが、ここでは、それが全く目立たない点で寧ろ少ない例に属する。それは公的政治の世界のものではなく、純粋に友人としての申叔に、内的に厳しく向き合って、その緊張の中から生れたものなのである。

この二つの文は、二年の差をもって書かれ、韓泰、劉禹錫、そして宗元は両者に共通するが、他の友は互に出入りして共通しない。[23] そしてこの中には、王叔文の事件に参加していない者の名も見られるので、この結合は事件以前からのものであることを示すことは勿論である。宗元が多数の友をもっていたことは既に述べたが、宗元を中心にして考えた場合、いくつかの友人グループを一つの円として想定すれば、その重なりのもっとも多い部分が、友人としてもっとも親密な、党的結合を示すものであるといえないであろうか。「送崔羣序」に於て、宗元は李建、韓泰、崔羣という三人の友人を挙げて「正は韓に求め、和は李に襲し、崔君に就いては其の中を考う」[24]とし、さらに「余崔君に於て通家の旧、外党の睦有り」としているが、「外党」というからには、家同士とかいう、旧くからのつき合いによる友人たることを示したものとみてもよいであろう。これは王叔文のところで再び触れることになるが、これらの友人の中で、早くから深い交りを結んでいたのが、韓泰、呂温、劉禹錫などであり、この人達を中心とする思想的交流が、やがて当然の要求として、次第に政治的色彩を強めてゆくのである。

これらの友人の中で、劉禹錫は貞元九年進士科及第で、宗元とは「同升の友」[25]であり、その「天論」は宗元の「天説」を一段と展開させたものとされ（重沢俊郎「劉禹錫の哲学」・東方学論集所収）、宗元の合理的思想には、根本的な思想的交流を両者の間にみることができる。また韓泰は、宗元よりも二年遅れた貞元十一年の進士であるが、両者の交

渉は「宗元常に韓安平と上京するに遇う」[26]にもみられるように、進士科受験当時の初期にまで遡ることができ「古道を追用して、今世に交わる」[27]に示されるように、両者の関係は、次第に思想的にも深められてゆくのである。そしてこの二人に、さらに呂温や凌準[28]を加えて、陸淳の「春秋微指二篇」「春秋集注十篇」「春秋弁疑七篇」などが講究され[29]これらの友人の間の、「徳を講じ、儒を討ず」[30]その過程に於て得られた師が、文通先生陸淳である。

この陸淳に、宗元は早くから師事しようと願っていたが、その念願が叶って「弟子の礼を執る」[31]ことができた。しかし、その時は陸淳は最晩年で病気がちのため、親しく講討することはできず、時折要論を聞く程度であったが、宗元はその著作を「伏して読」[32]み、「反覆甚だ喜ぶ、若し吾れ前に生れて此を距ること数十年なれば、則ち是の学を得ず」[33]として、「久しく隠れ」[34]ていた春秋に対する、新しい学風に接し得たことを喜ぶのである。春秋三伝のうち、これまでは左伝のみが尊重され、しかも経義の本質には、疑念など殆んど向けられなかったのに反して、啖助以後、陸質によってはじめて「吾れ三家の説を観るに、誠に未だ春秋の大宗に達せず」「今公羊穀梁の二伝殆んど絶え、左氏を習う者皆経を遺し伝を存し、其の事迹を談じ其の文彩を翫ぶこと史籍を覧るが如し、復た春秋の微旨有るを知らず」[35]と説かれ、その誤りに対して「其れ我れと志を同じくし、唐虞の風を見んと思う者有らば、宜しく心を斉しくし、慮を此に極め、本を端し源を澄さんとするの意を得べし」[36]と呼びかけてくるこの派の主張が、鋭敏な宗元を動かさずにはおかなかったのは当然であろう。

「道を講ずること二十年、書して之を志すことまた十年、その事大備す」[37]と述べ、また「巨儒」[38]という言葉をもって、宗元はこの碩学を讃嘆しているが、梁の名儒陸澄[39]をその祖にもつこの人の春秋学は、「淳筆を秉り簡を持ちて啖先生の左右に侍すること十有一年、述釈の間毎に善誘を承け微言奥指頗る得」（春秋纂例巻一）といい、「春秋の意三

伝の釈かざる所は先生注中に悉す」（同）と述べた、趙州の啖助をその師とし、河東の趙匡を兄弟子とし「尽く二家の学を伝う」[40]といわれる。啖助伝賛（新唐書巻二百）に「趙陸従って之を唱え、遂に時に顕わる」とあるのをみればある程度の同調者を得たのであろうが、新唐書（巻二百）は啖助の学に対して「穿鑿詭弁」といい「一己の固を固持」するとして、その新しい学風に対して殆んど理解を示そうとしないのである。旧唐書にもいうように、彼等の学は当時としては、いまだ「異儒」[41]に過ぎなかったのである。

かっては「僕少きより学問を嘗み、師説に根さず、心は古書を信ず」[42]という態度をもって、矻矻と努力して経書の思想に没入した宗元ではあるが、ここに至って、ようやくこれまでの模索の域から脱し、一定の立脚地に立つ程になってきた。時には「啖趙陸氏と雖も、皆未だ及ばざる所」[43]のあることを認めてはいるが、陸淳が「其の道は霊府を貫き、其の理は事実に浹し」[44]とする統一的見解への刺戟が、宗元には「其の道は生人を以て主と為し、堯舜を以て的と為す」[45]という思想に――生人という言葉は元来、太宗に対する韓避から、生民の代りに用いられたものであるが、宗元はこれを好んで使用しているかに見える。この語については後述する――自覚的な意味に於て、次第に発展するまでになったのである。

宗元が師という意識をもちうるもう一人に陽城があった。道州刺史となって都を去ろうとする陽城に対して「僕もまた其の師表を失う」[46]といい、また「公征くこと甚だ遐く、吾が党誰をか師とせん」[47]とあるのをみれば、単に個人としてではなく、緊密な党的結合に於て、陽城がいかに尊敬されていたかがわかるのであり、王叔文の執政時代に陸贄とともに、都への召還が議決されたことも、恐らくは彼等の意見によるものとみてよいであろう。陽城は太学生に対しては経籍の奥義に達せしめ、「儒業を極めし」[48]めたであろうが、宗元らは実際に師事して、その思想的影響を受け

たというのではなく「端粋沖和、高嶷懿醇、道徳仁明、孝愛友悌」[49]という高い人格と、諫臣として「抗志励義、直道是陳」[50]というような面が、その師表とされたものと思われる。

こういう多くの師友の中にあって、特に宗元の今後の思想生活に深い影響を与えているもう一人は呂温である。既に長安時代にもみられ、永州時代の宗元の思想的中核をなすとみなされる「大中」という、中庸に基く思想の形成は「宗元幼にして学を好むと雖も、晩にして未だ道を聞かず、君子を友に獲るに洎び、乃ち中庸に適くを知る、邪雑を削去し、直正を顕陳して、道謬らずと為す、兄実に然ら使む」[51]と、これが、呂温よりの影響によることを認め、さらに「嗚呼中に積みて必ずしも外に施さず、古に裕にして必ずしも今に諧わず、二事相期する、古より至りて少なし、化光（註・温）に至りては、最も太甚し」と、この友を讃嘆するのを惜まなかった。

宗元は韓愈の「師道」に対しては批判的にみえるが、実は師道の棄てて省みられない現状を繰返し指摘し「吾れ師に従わんと欲す、従う可きは誰ぞや」[52]と、切実に師を求め、師がなくば「吾れ何を以て成らん」としている。宗元にとって去るべきは「其の名」[53]であり、「其の実」は、本来決して軽視すべきではない。韋中立に対して「子得る有らざれば、則ち我れ得ん」というように、かってみられた、いわば上下関係の師弟道ではなく、その目標は共に道を求め「亟に来りて以て是の道を広めん」とすることにあったし、厳厚に対して「終日吾子と言い敢て倦まず、敢て愛まず敢て肆にせず、苟も其の名を去りて、其の実を全くす」[54]というように、道のための交りに対しては、全力を傾注して惜しむことはなかったのである。

そうして、宗元が「二子独り章句の師のみ」[55]と評した馬融、鄭玄のたぐいは「今の世固より章句の師を少しとせず」という状態であったであろうが、「僕幸にして其の人に非ず」と批評するように、これまでの学問は時代を推進する

力を持つことはできなかった。社会的進運に応ずる新しい道統が確立されず、時代全体が新たなる思想を模索していた当時の思想的現況の下にあって、真の師が切実に求められるとともに、次の時代を目指す、階層をほぼ同じくする優れた青年の間に、師弟間の関係に準ずるものとして、思想的切磋を通して深い友情が結ばれ、彼等の間に、時代の閉塞状態を打破しようとする気運が生れるのは当然のことと思われる。

こういう時代の動きは、呂温の言葉に徴してみても、更に確認することができる。温は「凡そ学の道厳師を難しと為す」といい、さらに「不師は廃学の漸也」と強調するとともに「而今而後、乃ち不師不友の人を知るとも、与に政を為し交を論ずべからず」とすら極言するのであるが、師の求られないいまは「我と志を同じくする者は則ち吾が師と為す」といわざるを得なかった。この文は族兄呂臯に宛てたものであり、[56] 恐らくは陸淳や宗元と出合う以前のものと思われるが、「儒書振わざること久し、温百代の下に生れ、昧劣を顧みず、凛然として志有り、聖城を翹企して従う所を知らず」という悲嘆は、徒に章句を受けることに満足しえなかった、進士出身の青年の均しく願うところであったのである。確かに政治・社会の変化と共に、後半期の唐は内部からも思想的変質を迫られていた。

宗元は父鎮のために「先侍御史府君神道表」を建て、その碑陰に「先君石表陰先友記」（巻十二）を書き添えて、父の友人六十四人の名を、その出身地、略歴、人柄などとともに記し、その終りを「先君の与に友とする所、凡そ天下の善士挙集まる、信譲にして大いに顕われ、道博くして、雑り無し、今の世交を言う者以て端と為す、敢て悉く尤も厚き所の者を書き、茲石に銘を以て背に附すること右の如し」と結んでいる。一個の人間の全貌を表現し、それを書き留めるためには、その友の名をも挙げずにはいられなかったのであろう。

宗元は「党」「党人」「我の党」などという言葉を随所に使っているが、その学問と人生とは、まさしくこの友なく

しては考えられないのである。確にその周辺には多くの人が集まっている。しかし宗元は「余慎んで友を取り、惟心に虔しむ、人間を周遊すること、二十年に余る、擯辱恥に非ず、升揚賢に非ず、一に道を貫く」[57]という能度を堅持し韓愈がその劉禹錫に対する友情の深さを讃嘆して世に訴えているように、[58]それは離合集散常なき利のための友ではなかった。それが純粋であればこそ、一方に於て、「人の友となるは、道を以てせず利を以てす、世を挙げて友無し、故に道益ます棄てらる」[59]と永州時代の体験を悲嘆せざるをえなかったのである。

個に沈潜し、内部に徹しようとするのではなく、政治に生涯のすべてをかけようとした宗元にとって、学問、思想の共鳴者が集まってそれが党となり、やがて政治活動に発展することは「賢を用い愚を棄て、推して以て物を革め、民の蘇を宜せしむ、是の如くして列せざるは、殆んど孔子の徒に非ず」[60]という革新的考え方や、その孔子について、利に関して孟子と比較した文中の「幸に下を撓にせずして以て其の政を成し、交うるに其の大利を得、吾が言已むを得ざるのみ、何の暇あって従容として孟子の若くならんや、孟子道を好みて情無し、其の功緩にして以て疏、未だ孔子の民に急なるに若かざる也」[61]などをも考慮に入れれば、その革新的政治活動は自然の成行であり、また、そうあらねばならなかった。こういう積極的な改革意志をみれば、王叔文との結びつきなども、単にに受動的にのみ考えることはできず、必ずや、もっと能動的な力が内部に熟しつつあったとみる方が、寧ろ妥当であろう。

事件に連坐して流謫された者のうち、凌準の死に直面して、特に「我が罪大なり」[62]と、それを恰も自己の責任であるかの如く悲嘆し、また別に「嘗て其の罪に非ざる有り」[63]と重ねて述懐していることや、通鑑にも、進士出身者としては、特に韓泰と共に宗元の名が中心的人物として扱われ、凌準については、順宗実録に「而して凌準程异等又其の党に因りて進む」（巻五）と、その間に一線を劃して記述されているのをみれば、少なくとも、宗元はこの事件への参

加に対する同志中の主唱者の一人として、他を説得して、運動を推進したと見做しても、さして誤はないと思うのである。そして「宗元衆党の人の中に於て、罪状最も甚だし」[64]という述懐も、こう考えたとき、最も自然に理解できるのではあるまいか。

これは永州時代のことなるが、宗元は「敵戒」（巻十九）に於て「皆敵の仇を知りて、益の尤れりと為すを知らず皆敵の害を知りて、利の大なるを知らず」と述べて、多くの史的実例を挙げて説明するのである。長安といまの永州を比較するとき、これまでのような、緊張対立のうちに明け暮れしていた頃の刺戟を実感せずにはいられなかったのであろう。確かに宗元は「幽独」[65]の中にあって、「恐懼を捨つれば則ち閑無事」であり過ぎ、その中では「発明する所無し」という状態が続いたのは、特に三十六歳までの作品数と内容とからみても、疑いを容れない事実であった。

流謫の後は、これまで切磋し合った長安の朋友は、無論「交遊解散」[66]する状態であり、さらに「羣朋増飾して無状」[67]「親友の遺る所」[68]という、追い討ちをかけられるようなことをも、新たに経験することになった。韓愈が宗元に対する友情として、かつての死交を嘲笑するのも、確かにこの現状からすれば、あるいは当然といわねばなるまい。

それにも拘らず、流謫地永州に於ける宗元を内から支えたものは、矢張外ならぬ友情であることも銘記すべきであろう。かつての長安時代の友のうち、後まで友情の続いたのは呂温、劉禹錫などであるが、「非国語」を作るに当り「余勇にして自から制せず、以て後世の訕怒に当る、輒乃其の不臧を黜け、世の謬を救わん」[69]とするような志を率直に、安んじて告げることのできたのは呂温であったし、更に続けて「吾が書を成さんと度る者は化光（温）に非ずして誰ぞや」といわざるを得なかった。その死に直面しては「吾が道息む」[70]と悲嘆せざるを得なかったが、後に説くように、非口語と陸淳の著作との関係を考えれば、呂温の存在は一層切実になるのである。

しかし呂温はこの時遠く離れて道州刺史の任にあった。その外に、もう少し身近に語り合える友として、宗元を力づけた者に、元和三年、たまたま永州に流謫されてきた呉武陵があり、その友情はかつての同志と同じとはいえないけれども、永州在任中継続している。「覆を蒙り幽独、会足下至る、然る後我の道を助ける有り、一たび其の文を観心朗に目舒び、炯として深井の下に、仰で白日の正中するを視るが若し」[71]と、武陵に会った時の感想を述べているのは、流謫中の宗元としては、ごく自然の感情の流露であろう。三十六、七歳頃から宗元が心の平静を得て、再起の機会を得るようになったのも、こういう友の存在を無視することはできないのである。こういう友を永州以後に求めれば、崔策をはじめ、多くの人達が次第に宗元の周辺に集まっているのは「亦焉に謫せられ来りて、幾何も無きに、文を以て余に従わんとする者多く萃る」[72]によっても知ることができる。勿論、長安に於ける、王叔文の事件当時の人材が競って交流し合った状態と同じとはいえないが、宗元の生活に於ける基本的態度には、長安以来一貫したものがみられるのである。

註

(1) 亡姉前京兆府参軍裴君夫人墓誌（巻十三）　(2) 与李翰林建書（巻三十）　(3) 故叔父殿中侍御史府君墓版文（巻十二）　(4)〜(11) 先侍御史府君神道表（巻十二）　(12) 上桂州李中丞薦盧遵啓（巻三十五）　(13)(14)(18) (4)に同じ。　(15)〜(17) 先太夫人河東県太君帰祔誌（巻十三）　(19)(20) (1)に同じ。

(21) 宗元自身も「愚幼時嘗て音を嗜む」（「与李睦州論服気書」・巻三十二）とあり、その経験内容が詳細に記されている。ここでも家庭環境の一端は知りうるのである。

(22) 万年県丞柳君墓誌（外集補遺）

(23) 送班孝廉擢第帰東川覲省序（巻二十二）に於ては、隴西の辛殆庶を送るために、独孤申叔、李行純、李行敏に宗元が集まっていて、少しづつの出入りがここでもみられる。

(24) 送崔羣序（巻二十二）　(25) 送幸南容帰使聯句詩序（巻二十二）　(26)(27) 送韓豊羣公詩後序（巻二十五）

(28) 凌準については「読書為文章、著漢後春秋二十余万言、又著六経解囲人文集未就」（「故連州員外司馬凌君権厝誌」巻十）とあり、「復於亡友凌生処、尽得宗指弁疑集注等一通」（答元饒州論春秋書・巻卅一）にも示されるように、春秋学では宗元より早かったようである。

(29) 陸淳の師啖助の『春秋集伝』や『例統』（三巻）は唐書経籍志をはじめ、それ以後にも見えない。同じく趙匡の『春秋闡微纂類義統』（十巻）は宋史芸文志にはじめてみえ、明史芸文志では十二巻、陸淳著に変り、四庫総目では既にみられない。ただこれらの説の大体は陸淳の諸著の中でうかがうことができるし、さらに、清の馬国翰輯にかかる『春秋集伝』（一巻）、『春秋例統』（一巻）や『春秋闡微類義統』（一巻）（いずれも玉函山房輯佚書巻三十九に所収）によって、整理が行われている。ここに挙げられている陸淳の諸著のうち、『春秋集注』十篇は、唐書経籍志では二十巻としてみえるが、宋史芸文史には既にみえない。宗元が講読した分としては挙げていないが、『集伝春秋纂例』（十巻）は唐書経籍志にもみえ、「啖子所譔統例三巻皆分別条流通会其義趙子損益多所発揮今故纂而合之有辞義難解者亦随加註釈兼備載経文於本条之内」と跋文にみえるので、これによって啖趙二氏の所説の大要はわかる。四庫総目にもみえる。『春秋弁義』七篇は、唐書経籍志に『春秋弁義』七巻とあり、四庫総目にみえる。『春秋徴指』二篇は、経籍志では『春秋微旨』二巻とあるが、宋史芸文志では三巻となり、四庫総目も「微旨」の字のまま、三巻となっている。その他、明史芸文志には、陸淳と名記はないが、一連の陸淳の著作中に『春秋原要』（二巻）の名がみえるが、いまは不明である。

尚、呂温は陸質の進集注の表の中で啖、趙、陸三氏の著作にふれ「潤州丹陽県主簿臣啖助為厳師、以故洋州刺史臣趙匡為益友、考左氏之疏密、弁公穀之善否、務去異端、用明本意、助或未尽、敢譲当仁、匡有可行、亦刈其楚、輒集注春秋経文、勤成十巻」（『呂衡州文集』巻四、代国子陸博士進集注春秋表）と要旨をまとめている。

(30) 唐故衡州刺史東平呂君誄（巻九）　(31)〜(34) 答元饒州論春秋書（巻三十一）　(35) 春秋集伝纂例（巻一）

(36) 春秋微旨序　(37)(38) 唐故給事中皇太子侍読陸文通先生墓表（巻九）

(39) 『南斉書』（巻三十九）にその伝が見え、博学の姿はうかがえるが、その学問中には新しい動きは未だみられない。

(40) 新唐書（巻九十三）

(41) 旧唐書（巻百三十九下・陸質伝）「予所著経伝若旧注理通則依而書之、小有不安則随文改易、若理不尽者則演而通之、理不

通者則全削而別注、其未詳者則拠旧説而已、但不博見諸家之注不能不為之恨爾」（春秋集伝序）というような啖助の学風が、この時代に異儒と見做されるのは、やむをえないことでもあった。

（42）答問（巻十五）　（43）（31）に同じ。　（44）春秋微旨序　（45）（37）に同じ。　（46）与太学諸生喜詣闕留陽城司業書（巻三十四）　（47）～（50）国子司業陽城遺愛碣（巻九）　（51）祭呂衡州温文（巻四十）　（52）師友箴并序（巻十九）　（53）答韋中立論師道書（巻三十四）　（54）（55）答厳厚輿秀才論為師道書（巻三十四）　（56）与族兄皋請学春秋書（『呂衡州文集』巻三）　（57）祭呂敬叔父（巻四十）　（58）柳子厚墓誌銘（韓昌黎集巻三十二）　（59）師友箴（巻十九）

（60）全義県復北門記（巻二十六）

（61）吏商（巻二十）　この中で宗元は義と利を対立的にみる孟子を批判し、孔子のごとく、民の為に利が博ければ、当然それは求められるべきであるとする。

（62）故連州員外司馬凌君権厝誌（巻十）　（63）故連州員外司馬凌君墓後誌（巻十）　（64）寄許京兆孟容書（巻三十）

（65）答呉武陵論非国語（巻三十一）　（66）答問（巻十五）　（67）答貢士廖有方論文書（巻三十四）　（68）謝襄陽李夷簡尚書委曲撫問啓（巻三十五）　（69）（71）与呂道州温論非国語書（巻三十一）

（70）祭呂衡州温文（巻四十）

宗元の友情に対し、呂温の宗元への言及の言葉は現存する『呂衡州文集』（十巻）には全くみられない。唐書経籍志以来「呂温集」（十巻）といわれてきたが、四庫全書簡明目録に「其集本劉禹錫所編、久已残闕、此本乃常熟馮舒重編也」とあるのをみれば、清の馮舒による重編本には、その部分に既に散佚したものがあるのかも知れない。

（72）法華寺西亭夜飲賦詩序（巻二十四）

四

二十六歳、博学宏辞科及第後、間もなく集賢殿正字となった宗元は、以後約七年間を中央に於て政治の実務に携わることになった。漢代のように「官に列して以て学を立つ」[1]ことを願って、学そのものを官との関連に於て考え、ま

た「官や道の器なり、之を離るるは非なり」[2]と、道の実践の具体的な場をも官にみた宗元は、その師陸淳に対してすら「道の存するや書を以てし、政に施すに及ばず、道の行や言を以てし、其の理を覩るに及ばず」[3]と、実践的機会の遂に本格的に到来しなかったことを悲しむと同時に、若干遺憾の意を表するのである。

しかし、いまは「御史尚書郎たるに及び、自から幸に天子の近臣たるを以て、其の舌を奮うを得、思いて以て天下の鬱塞を発明せんとす」[4]という覚悟にも示されるように、宗元は政治を外からながめて、これを批評する立場にとどまっているのではなく、自からその内部にあって、唐代後期の政治機構の中に横たわる諸矛盾を身をもって体験することになった。これとほぼ同じ立場にあって、白居易は「諷諭詩」を作り、主として民の苦しみを歌い上げた。しかし、それは詩人白居易に映じた、悲嘆に満ちた世相の表現ではあっても、直ちにそれが、改革意志に連なるものではない。ところが宗元は、政治上の矛盾を歌い上げたり、単にこれを文にして批判するだけで足れりとはしなかった。具体的な政治批判は、更に新しい実践的展開をみせないわけにはゆかないのでなる。それが王叔文との提携による改革運動によって頂点に達するのであるが、そこに到るまでの内的過程を少しく跡づけてみよう。

宗元をとりまく最も身近な問題として、「甚だ憤る」[5]べきことに、科挙の運営と、それに伴って屢々起る、親しい人達の下第という具体的事実があった。宗元はそういう人達に対し、これを慰めるために、多数の文を書送っているが韓愈のそれが、ややもすれば主観的悲しみを述べているのに対して、ここでは根本的に制度悪が追求されるのである。

宮崎市定は、『科挙』の中で、

中央政府の官庁に於いて吏部のみは独特の性質を有する。唐の社会が固定化を示してより、新たなる門閥制が出現すると、官吏の進退も漸く門閥が物を言ふことになり、官吏の進退を司る吏部の官には、門閥家系に通じたる

貴族子弟にあらざれば任用せられぬこととなつた。吏部こそは貴族制擁護の牙城である。（二三頁）

と述べているが、「僕京師に在りて、凡そ今に九年、其の間意を得し者、二百有六十人なるも、其の果して文を以て克つ者、十に一二なる能わず」[6]という、奇怪な事実を経験している宗元も、科挙に於ける制度悪の根源をこの吏部に見出して「近制に、凡そ仕を王に得んとする者、歳ごとに名を吏部に登く、吏部は則ち必ず其の等列を参えて、分てこれを合す、三十人を率いて以て曹と為し、これを甲と謂う、名書きて三と為し、其の一は之を有司に蔵め、其の二は之を中書泊び門下に蔵む、大選置、大考績毎に、必ず関決会験し其の成を視る、合わざる者有れば、有司に下して去らしむること甚だ衆し、是に由りて吏は姦を為し以て威を立て、知を賊い以て権を弄するを得、詭譎竄易して、其の実を示す莫し」[7]というのである。吏部の当時の政治上に占める位置を考えるとき、これはある意味で、門閥的勢力に対する正面からの批判にもなるのである。しかも、更に宗元は語をついで「夫れ吏たる者は人に役せらるる也、人に役せられて其の力を食う、報ずること無かる可きか、今吾れ将に其の慈愛礼節を致し、而して其の欺偽凌暴を去り、以て斯人に恵み、而る後に其の禄有り」といい、「庶わくは吾が心を平らかにして、色に愧じざるべし」と結んでいるところからすれば、内部にいかに激しい不満が渦巻いていたか、想像に難くないのである。

こういう官吏に対する不満や批判は、さらに、この期の文中のいたる所にみることができる。「黠吏」[8]とか「貪官」[9]や「俗吏前に満つ」[10]という、官一般に対する言葉にも、その底に激しい感情を蔵しているし、「種樹郭橐駝伝」や「梓人伝」のような一種特異な伝記に於ても、同種の韓愈の「毛穎伝」に対して、「以て其の鬱積を発す、学ぶ者之を得て励ませば、其れ世を益する有らんか」[11]といっているのでもわかるように、結局、その真のねらいは「以て官戒となす」[12]とか「大なる哉相や」[13]に要約されるように、政治や官人に対する、痛烈な批判の一表現形式であるということが

できるであろう。しかも、韓愈の場合は「圬者王承福伝」なども「自鑒」のためとあるように、個の生き方に係わる部分が甚だ多く、そのために文全体が一種の屈曲と陰影を伴っているのに対して、宗元のものには、まだそういう影は見られず、批判がより率直な形で提出されているのである。これは、それが書かれた当時の年令や、人生経験の相違によるともいえようが、本質的には、改革に対する実現の可能性を信ずるか否かの、つまり、改革に対する態度の差異に帰することができるように思われる。

こうみてくると、次に、宗元のこのように激しい批判の拠り所となる、基本的原理が何処から得られたかが問題になる。宗元のこの期に於ける、国家や政治に対する考え方は、これまでにみてきたような、批判的、否定的方向と、もう一つ見逃すことのできないのは、これと併行して、それとは一見正反対な、肯定的側面とであり、両者は相反するようにみえて、実は決して分離したものではなく、一つに統合されているのである。一種の理想像を描き、これを信ずることなしに、唯、空しく批判を繰返すことは何人もできないからである。

韓愈は多くの経典の中で、特に孟子から深い影響を受け、その道統を継ぐ決意を示して、未完成ながら一種の学問的体系を樹立するに至った。これに対して宗元は、長安時代に於ては、政治的実務に携わっている関係上、現実の政治的関心が極めて強く、また、そこに生起する諸問題の解決に直面することが多く、その解決の方途は、当時の一般官僚と同じく、儒教経典そのものに依存している。その限りに於て、本質的に儒教的教養以上に、宗元に独自な観点を見出すことはできない。しかし、現実政治と、それに対する儒教思想や政策の具体的適用という、一種の両者の対決が、宗元のように、主体的意味に於て極めて現実的関心が強く、かつ妥協を許さない、原理への潔癖さをもつものによって行われる場合には、現実と思想との内的対立関係をいよいよ鋭くし、現実への批判的眼光を透徹したものに

すると同時に、逆に、その依拠する経典そのものに対しても、大胆な、現実的かつ合理的検討が行われようとする。つまり後を向いて、伝統的な儒教経典に対し、「古を統ぶる」ことは、そのまま、現代に於て「今を包む」現実的政治問題解決への真摯な努力となるのである。「其の理を挙げれば、則ち皆謨明渕沉にして、剖微窮深、是非を劈析し古今を校度す」[14]とは、まさしくこのような活動を内的に述べたものといえよう。

「柳河東集」世綵堂本の注に従って、宗元の文及び思想の典拠となっている経典を調べてみると、詩経、礼記、周礼、左伝、書経、論語、易経、史記、孟子、漢書、穀梁伝などが比較的多く、楚辞、国語、荘子、文選などがこれに次ぎ、さらに荀子、公羊伝、後漢書、晉書、呂氏春秋、春秋経、韓非子、列子、淮南子などがある。勿論、引用回数と影響の深浅とは必ずしも比例しないし、また例えば藍田県時代の「益ます老子を学ぶ」[15]にある思想方向などは、このような外的方法では捕捉しがたく、またその引用の仕方を検討すれば、単に経典の言葉が文学的に取り入れられる場合と――これとて、単純な借用ではなく、古典に典拠をもつという意識と深く結びついている――内容そのものが思想的、或いは史的に影響して取り入れられているのとに分けうるので、引用態度は必ずしも単純ではないが、それでも尚、宗元がこれまで修得した儒教的教養と、その外への適用態度とは、これによって、大体に於て把握することができる。この中で、詩経の言葉の文学的受容の多いのを除けば、礼記、周礼、左伝、書経、論語などの、内容的引用が多数を占め、それらの多くは、現代に於ける合理的批判にもたえうるものとして、現実に展開される政治的動きに対する規範としての役割を果すに充分な力を背負わされているのである。このように、儒教経典への最初の接し方は、これまでの伝統的な態度とさして変りないが、これら経典の扱い方の上で、宗元に方法的開眼を与えているのが、啖助、趙匡、陸淳による三伝の批判的研究であると思われる。

宗元はこの三氏の学を、経典そのものの扱い方と、現実の政治へとの二つの方面に展開した。先ず前者で具体化するのは「非国語」であるが、その序にもあるように、それが実際に作られたのは永州に於てであるが、構想は既に長安時代にたてられたものである。そしてその展開の仕方をみると、先ず問題点を含む国語の本文が挙げられ、次いで「非に曰く」として、それに対する自説が述べられる。それは陸淳の諸著にみられる「左氏云」「公羊曰」「穀梁曰」「啖氏曰」「淳聞干師曰」と、三伝を比較検討した結果を、自説でまとめるという形式が、そのまま採用されるのである。勿論、非国語は宗元の独自の動機から作られたものではあるが、内容や方法の上から、宛も陸淳の三伝批判書の続編をみるかの観を受けるのである。これは永州のことになるが、宗元は劉禹錫の、ややもすれば陥り易い観念的独断論に対してこれを戒しめ「君子の学、将に以て異有るや、必ず先ず其の書を究窮し、究窮して得ざれば乃ち以て立て正すべき也」「然れば務めて先ず昔人の書を窮め、不可なる者有りて後に之を革めれば則ち大いに善し、之を謹んで遽にする勿れ」[16]といって、新奇な説に対しては極めて慎重な態度をとっているが、これなども『春秋集伝纂例』の巻一にみられる原典批判の態度や方法――陸象山は「弁駁精確」と評する――に基ずく発言とみられるし、こういう原典に対する批判的考察方法の修得こそ、やがて、更にこれが広く諸子にまで適用されて、「弁列子」「弁文子」「論語弁」「弁鬼谷子」「弁晏子春秋」「弁亢倉子」「弁鶡冠子」などにみられる、作者、時代に対する、これまでにみられない、新鮮な内的批判的考察が展開されることになるのである。

陸淳の宗元に対する影響のもう一方は政治面であるが、ここでまた集伝纂例が問題になる。もっとも、この書は既に唐書経籍志には見えるが、宗元の講読書の中にはなく、その代りに、集注、弁疑、微旨などが見える。纂例はこれら三著の内容を四十の項目別に整理したもので、宗元に全く未知のものという性質のものではない。そして、整理の

方法を十挙げるが、その一つに、

一日悉書以志実朝聘用兵之類一切書之以著事実

とあり、ある意味で史料集的性格をもつことは明かである。しかし、それは勿論単なる史料や用語例の集積ではなく、「学者をして類を以て義を求めしむ」[17]とあるように、儒教的な問題意識に基ずく分類である。その意味で、日常、政治に於て生起する諸問題に対する、謂いうべくば三伝を分析し、これを縦横に駆使する操作の中に築き上げられた、問題別思想辞典的役割りを充分に果すに役立っているのである。宗元が陸淳に実際に師弟の礼を以て接したのは、陸淳の最晩年であり、それはそのまま宗元にとっても、長安時代の終り頃に当るが、呂温、韓泰、凌準などと共にその著作に接したのは、それよりも早く、その影響は、やがて具体的には、主として巻三に集められている、封建論をはじめとする論に於て開花し、更に広く一般的考え方の基礎にもなって、新たな思想的展開を示すに至るのである。

このように、三氏の春秋学は宗元に深い影響を与えはしたが、それはいわば、文献学、政治学の一部門としてであって、直ちに宗元の哲学を意味するものではない。その思想的本質は、長安時代に於ては未だ未熟の城を脱しないが若し強いてそれを求めれば、呂温と共に求め得た中の思想であろう。これについて宗元は「近世の理道を言う者衆し、大中に率由て出ずる者は咸なこれ無し、其の言の儒術に本ずきては、則ち迂廻茫洋として其の適くことを知らず、其の或いは事に切なるときは、則ち苛峭刻覈にして従容たる能わず、卒に大道に泥む、甚だしきは怪を好みて妄言し、天を推し神を引き、以て霊奇と為し、恍惚として化するが若く、終に逐うべからず、故に道天下に明らかならず、学ぶ者の至りて少なき也、吾れ君子を友に得てより後、中庸の門戸階室を知り、漸染砥礪して道真に幾し」[18]というように、儒教に於ける固定的態度と、先例の無条件の適用を批判しつつ、中庸の立場を明かにするのであって、「大中」

という言葉に表現される思想が、ようやくにして宗元の思想的根柢を形成するに至ったのである。勿論これは、単に常識的に理解される中庸ではなく「中の正にして外に惑わざるは君子の道也、然して顕然翹然として其の正を秉り以て世に抗す」[19]にも示されているように、それは時として、激しく、積極的な活動にも転じうるのである。中とは本来そうあらねばならないが、宗元の体験に基ずく言葉によって、明確な註がつけ加えられたといえよう。

このような、長安に於ける思索と政治的実践の中より生れた成果が――実際の作製は永州時代に持ち越されてはいるが――「貞符」や「封建論」である。いまこれらに入る前に、宗元の批判の規準が具体的な政務の中にあって、いかに適用されているかをみよう。

例えば「禜説」（巻十六）であるが、かつて宗元は御史のとき、「百神を南郊に合して、以て歳の報を為す」のを目的とする禜という祭の実施者となったが、不明の点を戸部に問い正すと、その内容の答えは「某に旱し、某に水し、某に蟲蝗し、某に癘疫すれば、則ち其の方守の神を黜して以て祭るに及ばず」ということであった。しかし、宗元の識っている『礼記』郊特牲にある、

八蜡。以記四方。四方年不順成。八蜡不通。以謹民財也。順成之方。其蜡乃通。以移民也。既蜡而収。民息已。故既蜡。君子不興功。

からすれば、その本質は「民の財」「民息う」によって明示されるように、決して神に関わることではなかった。それ故「神の貌や、吾れ得て見るべからざる也、祭の饗や、吾れ得て知るべからざる也、是れ其れ誕漫儆怳、冥冥焉として執取すべからざる者なり、夫れ聖人の心たるや、必ず道有るのみ、神に非ざる也、人に蓋うる也」と、本来の目的を忘れた祭事を批判せざるをえなかったのである。そして、宗元は、礼記の「淫祀無福」[20]にも注目し、その合理性

を挙げているのであるが、確かに礼記は、宗元の考え方にたえうる程、充分合理性をもつものであった。

また、これは集賢殿正字時代、即ち徳宗の貞元十五年に、淮西節度使呉少誠が反して百姓を掠め去ったので、諸道に命じてこれを討たしめようとした、宗元二十七歳の時に書かれた「弁侵伐論」（巻三）のことである。ここでは左伝と周礼とが引用されて、「侵」と「伐」とが厳密に区別され、「人の生を危くし、又賢人を害う」ときにのみ、伐が加えられるべしとし、さらに三有余、つまり「一に義余有るを曰い、二に人力余有るを曰い、三に貨食余有るを曰う」が備われば「物を害することや小」となり、それだけの備えがあって師が出されれば、短期間で戦争が終るので、「人の為の挙」になる。「公」といわれるのは、そういう時であるとする。一方「人の為に非ざる挙」が「私」であるとし、戦争を始めるか否かの際には、つねにこれらを考える必要があるとして文が結ばれる。これは春秋集伝纂例巻五の用兵例第十七とも関連するが、宗元の青年期以来の基本的思考傾向が、これらによってはっきりと示されている点で、深い意味があるといえる。

この文でもう一つ注意を要するのは「世日に乱れ、一変して戦国に至る、而して生人耗す」にある「生人」という言葉である。『史諱挙例』の引くところによれば、

唐制、不諱嫌名、二名不偏諱。故唐時避諱之法令本寛、而避諱之風尚則甚盛。

とあり、その挙例として、太宗の名諱の世民に対して、

世改為代、或為系、从世之字改从云、或改从曳。民改為人、或為甿、从民之字改从氏。

とある。但し、また武徳九年に、

世及民両字不連続者、並不須避。

とあるので、「生人」が「生民」の改められたものであることは、『国語辞典』に指摘されている通りであろうし、

乾元元年某月日、皇帝曰、予欲俾慈仁怡愉洽干生人[21]

などは、確かにその名残りを止めるものといえよう。

しかし、同じくその引用する「冊府元亀掌礼部奏議門」には、

唐憲宗元和元年、礼儀使奏、謹按礼記云…舎故而諱新。此謂已遷之廟、則不諱也。今順宗神主升祔礼畢、高宗、中宗神主上遷、依礼不諱。制可。

とあり、また韓愈が高宗の名諱「治」を既に使用している例を挙げているので、宗元が使用する「生人」を、太宗に対する避諱として、生民に代る言葉としてのみ意識していたか否か、やや疑問がもたれる。

ただ、集賢殿正字時代は、元和元年の奏をみる前であるので、宗元としては、外的制約によっていたともいえようが、既に「生民」という言葉も同時にみえるとともに、この生人という言葉はこれで終るわけではなく、この廿七歳のものを初出として、永州時代にまでに及び、二十数例を挙げることができるのである。

その言葉の意味は、

未若孔子之急民（巻二十・吏商）

吾観聖人之急生人（巻十九・伊尹五就桀賛）

にも示されるように、ほぼ民と同じであるが、そのほかに、「天地果して初め無きか、吾れ得てこれを知らざる也、生人果して初め有るか、吾れ得て之を知らざる也」（巻三・封建論）というように、天地の対となるような、かなり広い意味も附与されている。しかし一方には「人類鳥獣[22]」という言葉があるように、生物学的意味とは区別され、ま

た、一方「生霊」[23]によって、精神的存在を表わそうとするのである。そしてさらに、

孔子自以極生人之道（巻十六・乗桴説）

功在社稷、徳在生人（巻二十二・送班孝廉擢第東川観省序）

生人之性得以安（巻三十二・答周君巣餌薬久寿書）

というのをみれば、単に従来の狭義に於ける民の意味ばかりでなく、より精神的側面が豊かに、寧ろ人間という語に近ずきつつあるのをみることができるのである。その意味から、はじめは外的制約に左右されつつ、次第に、本質的には、政治的上下意識の含まれる民という言葉から脱却して、宗元が愛用するような内容を、この言葉の中に附与しつつ使用するに至ったと、みることはできないであろうか。宗元は「利民」（晉問・巻十五）と「民利」（同）とを厳密に区別して使用している。とすれば、この語についても、思想的観点から明確な区別をつけたとしても、いささかの不思議はない筈である。ただ、白居易や韓愈については、「生民」と併用で各々二、三の使用例をみるが、思想的に比較的近い劉禹錫では「生民」のみに限られている。しかるに呂温の『呂衡州文集』には、十巻という比較的少ない文集中に十数回の使用例がみられ、これに伴って、宗元も使う「生霊」がこれ亦、しきりに使用されているのをみるのである。とすれば、これは宗元個人の好みというよりも、ここから、一種の思想的系列を辿ることが、あるいは可能となるかも知れないのである。

宗元の儒教的教養や三氏の影響と、政治的体験の深化は、さらに史的感覚を鋭くし、やがて国家建立の根本や、帝王権の根源に眼を向けさせることになった。ここに生れたのが「貞符」（巻一）であるが、これは「臣尚郎たりし時、嘗て貞符を著す」によって明かなように、永州時代に書かれてはいるが、原型は長安時代のものであり、いわば長安

時代の思想的、史的考察の総決算であるともいえる。

先ず宗元の批判は、董仲舒の言説に於ける非歴史性、非合理性に向けられる。仲舒は受命について、

天之所大奉使之王者。必有非人力所能致而自至者。此受命之符也。天下之人同心帰之。若帰父母。故王瑞応誠而至。

というのであるが、宗元の立場からすれば、そういう、不合理な要素の混入された言説は、ただ「其の言淫巫瞽史に類し、後代を誑乱」するものに過ぎなかった。そういう要素を排除し、唐王朝が「徳を正し命を生人に受」けている事実を明らかにする点に、この文の主眼点を置こうとしたのである。それ故、筆は先ず大胆に人類史のあからさまな原初の姿に向けられる。「惟人の初、総総として生じ、林林として羣す、雪霜風雨雷電其の外を暴す。是に於て乃ち巣を架け穴を空けるを知る、草木を挽き、皮草を取り、飢渇牝牡の欲其の内に敺る、是に於て乃ち禽獣を噬み、果穀を咀むを知る、偶を合せて居り、焉と交わりて争い、焉と睽して鬪う、力大なる者は搏ち、歯利つ者は齧む、爪剛き は決つけ、羣衆きは軋き、兵良き者は殺す、披披藉藉、草野血に塗さる」とあり、ここに「然る後強く力有る者出で て之を治む」という現実を、率直に認めるのである。そして黄帝から堯、舜とうけ継がれ、この禅譲によってはじめて「大公の道」が樹立されたとする。既述のように、宗元は礼記に於ける中庸の思想を受容して、「大中」という言葉を屢々使用するが、「大公」とは政治の公的性格を明示する言葉として意味深いものである。

その後、漢に至るまでを述べ、その間に於ける「妖淫嚚昏、怪を好む徒」を批判し、封禅を主たる対象として、これらを「詭譎闊誕」と極言するであるが、その批判の原理となるものは「皆尚書に有る無き所」とあるように、古典そのものなのである。そして唐朝の無窮を願いつつ、それ故に「人の唐を戴き永永無窮、是の故に命を受くるは天に

於てせず其の人に於てす、休符は祥に於てせず其の仁に於てす」とし、さらにこれを重ねて「惟人の仁にして、天の祥に匪ず、天の祥に匪ず」と強調し、更に「未だ仁を喪いて久しき者有らざる也、未だ祥を恃んで寿なる者あらざる也」と、非合理なものに頼ることなく、合理的な、人間中心の政策に徹することを念願として文を結んでいる。

貞符との関連に於て、さらに国家の理想像を積極的に述べたものが「封建論」（巻三）であり、これ亦、永州時代の作ではあるが、貞符その他との思想的脈絡からみれば、その根柢にある思想は、長安時代に既に熟していたとみてもよいであろう。

「左伝」や「国語」、さらにまた陸淳の諸著によって[24]、周時代を史的に、寧ろ批判的にみた宗元は、「余以為えらく周の喪ぶこと久しく、徒に空名を公侯の上に建つる耳」という、冷厳な事実を認めざるをえなかったし、どれほど「威刑」をもって、国内及び諸国に臨んだにしても、秦が「四海を摂制し掌握の内に運ら」している現実をも否定することはできなかった。この視点からすれば、周は必ずしも理想国家ではない。史的感覚の鋭い政治家としての宗元は、寧ろ、封建制を郡県制に革めた秦に対してこそ「天下を公にするの端は秦より始まる」という評価を与えるのである。封建制は思想の観点から論ぜらるべきではなく、それはあくまで歴史や制度史の問題であり、それからすれば「古の聖王堯舜禹湯文武之を去る能わず、蓋し之を去らんと欲せざるに非ず、勢の可ならざる也」という結論は、当然の帰結として与えらるべきであった。

勿論、堯舜や周朝をそのまま否定するのではない。秦の評価に際して「咎は人の怨に在りて、郡邑制の失には非ざる也」というように、政治と制度とを厳密に分け、合理的な統一国家としての制度の中にあって、堯舜的政治が実施されることこそ、宗元の念願であり、「唐興り……時に則ち叛将有れども叛州無し、州県の設は固より革むる可から

ざる也」で指摘するように、藩鎮に対する新しい政策が樹立され、統一国家としての実が挙げられることを、祈念をこめて、結論ずけているのである。[25]

周朝を史的に批評し、統一国家としての秦王朝を、儒教的呪縛から解き放って高く評価したところに、政治家柳宗元の見識とその所信を明かにみることができ、「今夫れ封建は世を継いで理む、世を継いで理する者、上果して賢なるか下果して不肖なるか、則ち生人の理乱未だ知る可からざる也、将た其の社稷を利し、以て其の人の視聴を一にせんと欲せば、則ち又世大夫世禄邑を食み、以て其の封略を尽す有らん、聖賢其の時に生るとも、亦以て天下に立つ無し」に、若々しい革新の情熱を実感することができるのである。朱子は「封建は則ち根本較固にして国家恃むべく、郡県は則ち截然として制し易し、然れども来来去去、長久の意無し、以て固たるに恃むべからず」[26]といっているが、宗元の封建論は単なる理論的考察というよりも、寧ろ、さし迫った政策に対する理論的帰結であったのである。

藩鎮時代、京官時代を、挫折と不振の生活の中に送った韓愈は、ある程度の栄進は望みうるにしても、政治家としての抱負や夢を将来に託することは最早殆んど絶望的ですらあった。そして官人としての人生からすれば、本来不幸を意味しようが、文学こそ生の唯一の拠り所となりつつあったのである。それに対して、中央政界へ一応順調な参加をなしえた宗元が、当時を顧みて「始め僕の学に志すや、甚だ尊大にして、頗る古の大いに為す有らんとする者を慕う」[27]と述べているのは、幾分その中に自嘲の響きがなくもないが、少くとも出発時の真実はある程度伝えられているようである。その後「時に訕駡詬辱に遭う」[28]ことや「甚だ自から折挫」し、そのため「自から視ること欠然たり」[29]という時もあったに違いないが、理想を信じ、それに向って「一心に直遂」する真摯な情熱までが失われたとみることはできないのである。そういう情熱を以て現状を直視し、具体的な批判的活動が展開されるとき、その批判を通して

理想は一層強固なものとなる。そしてこういう経過のなかから、やがて封建論が結実したのであるが、しかし、そういう一種の夢を現代の唐帝国は託すに足らないであろうか。現実的には確かに批判すべき、改革すべき多くの問題を内包する唐国家ではあったが、宗元にとって、国家はやはり生命を託するに足る対象であり、永遠の生命であった。それがはしなくも表出されているのが、巻二十六にみられる官署の類であろう。

貞元十八年、藍田尉であった宗元は「武功県丞庁壁記」を書いている。いまその特徴をきわだたせるために、韓愈の「藍田県丞庁壁記」と比較しつつ説明しよう。

韓愈はこれを書くに当って、丞庁の政治的側面や、丞の職務を外面から述べようとするのではなく、徹底して、内部から、つまり丞個人の立場に立っている点が先ず注目される。「文書行われば、吏成案を抱き丞に詣り、其の前を巻き、鉗るに左手を以てし、右手に紙尾を摘み、雁鶩行以て進み、平立丞を睨し、曰く、当に署すべし、丞筆を渉し位署を占む惟れ謹む、吏を目し可不可を問う、吏得と曰えば則ち退く、敢て略省せず、漫にして何事も知らず、官尊しと雖も、力勢反って主簿尉の下に出ず」に表現されるように、それは最早改革の対象ではなく、自嘲と絶望に連なるに過ぎなかった。名目のみで、無用の官であるために、これを廃止せよというのであれば、それもよいが、ここではその意欲を感じることすらできないのである。その自信にくらべて、永らく不振にあえいだ韓愈の、地方官をみる眼には、このように絶望的なものがあったのである。

これとは対照的に、完元は個人の内部には殆んど触れるところがない。渺たる一武功県を述べるにも、礼記、周礼詩、穀梁伝をはじめ、唐制などが引用されつつ、殷周、秦漢の官制が述べられ、それと比較しつつ、「幅員の広きこと其れ猶古のごとき也」とか「秦漢丞相有り、今尚書左右丞、御史中丞有りて、九卿の列に至る、亦皆丞有り、下以

て天下の県に達す、政に小大有れども、其の旨同じき也」などというように、古代官制との同一性や類似性が強調される。それは一見、単なる官制の外的記述に過ぎないものともみえようが、官制といういわば国家の骨組が述べられることによって、国家全体の姿が髣髴として画かれ、それによって、古代帝国の統一国家としての生命が讃美されるとともに、それが、そのまま現代の唐帝国への信に連なってくるのである。冷静な外的記述にも拘らず、その内に蔵される情熱を感ぜさせずにはおかないのである。

その意味からすれば「館駅使壁記」に於ても、同じ態度を明瞭にうかがうことができる。文の冒頭は「凡そ万国の会し、四夷の来る、天下の道途畢く邦畿の内より出ず」にはじまり、ついで館駅の制が詳細に述べられ、そこに挙げられた四方の道はやがて「四海の内より、総じて之を合し、以て関に至る、関の内より、束して之を合し、以て王都に至」って、その全貌が示されるのである。まさしく、ここに於ても館駅の制が述べられつつ、その背後に統一国家としての唐帝国の姿が、理念的に画かれていることを否定することはできないのである。そして、この国家への信こそ、古典より得られた諸思想の顕現として、宗元の現実的支えとなり、また現実肯定の具体的根拠でもあった。

最後に、長安時代の宗元はこのように、政治生活に終始したのであるが、その生活の中に於て文章をいかに見、また自からは、いかなる態度を持していたかを見よう。

宗元は「尚書郎に至りては、百官の章奏を専らにす、然れば未だ文を為るの道を究め知る能わず」[29]といったが、これは科挙受験以来、引続く政治実務による形式的文章の作成に終始した、初期に於ける、文章に対する率直な本心の表明であろう。勿論、その間には「始め吾れ幼且つ少にして文章を為りしが、辞を以て工となす」[30]から出発して「長ずるに及んで、乃ち文は以て道を明かにするを知る」[31]という進展をみせ、やがて博く古典に道を見出そうとする活動

が始まり、道を求めることが文章を作ることに先行する。そしてその古典については「之を書に本ずきて其の質を求め、之を詩に本ずきて以て其の恒を求め、之を礼に本ずきて以て其の宜を求め、之を春秋に本ずきて以て其の断を求め、之を易に本ずきて其の動を求む」[32]というように、五経こそ「此れ吾が道の取る所以」なることを明示する。また、穀梁伝、孟荀、荘老、国語、離騒、太史公について「此れ吾が旁進交通する所以にして、以て之が文を為る也」とし、以後これらの古典が、いわば宗元の文章を支配するのである。

これは宗元のすべての文章にもいえるが、特に長安時代のそれには、これらの古典がそのままの形で引用され、あるいはそれが明かにわかるような、寧ろ古典を充分意識した上での文章が作られる。そして、その引用された文や語句は、勿論単なる借用を意味するものではなく、それはそのままわが思想を表現するものであった。従って、引用の羅列によって文が構成されているようなものでも、その選択、順序ずけ、論理的筋途の構成などは勿論宗元自身の判断によらねばならず、その意味からすれば、それは、宗元の文と見做されて然るべきものである。この点、朱子が「柳子厚の文模倣する所有る者は極めて精にして、自から諸書を解するが如し」[33]と評し、こういう努力がやがて「自然に純熟」すると指摘したのは当を得たものといえよう。

勿論宗元は「文を為るの士亦多く前作を漁猟し、文史を戕賊し、其の意を抉(ざぐ)り、其の華を抽き、歯牙の間に置く」[34]ことが「朱を奪い雅を乱」していることを充分に知っていた。それと同時に、曾て李景儉が「孟子評」を作ったとき、一評者が「善きは則ち善し、然れども昔人書を為るや、豈に是の若く前人に撫(ひろ)うか」[35]と評したのに対し、宗元は「致用（註・景儉）の志以て道を明かにする也、以て孟子を撫うには非ざる也、蓋し諸を中に求め、世に表わすのみ」と、これを批判している。この言葉は、そのまま宗元の文にも妥当するとみてよいであろうが、この場合宗元は、道を明

かにすることに重点を置き、文に対する文学的意識などは、後に追いやられていたとみてよいのである。

宗元の文は、当然のことながら、永州、柳州時代になっても急に古典との関連が薄れるようなことはない。また、長安時代にも殆んど古典とのつながりをみないような文も存する。そうすれば、いずれを宗元の本質にふさわしい価値あるものと見做すか、という区別をつけることは、およそ無意味なことといわねばなるまい。少なくとも、長安時代の宗元の文章に対する心理は「吾れ少くして文を為ると雖も、自から雕斷する能わず、筆を引き墨を行り意を快にして累累たり、意尽せば便ち止む、亦何の師法とするあらん、言を立て物を状べ、未だ嘗て人に過ぐるを求めず」[36]に尽きるであろうか。そして、これはまた劉禹錫が呂温に対する評に「年益ます状にして志益ます大にして、遂に文字を撥去して俊賢と交わり、気槩を重くし、名実を覈しくし、歆然として君に致し物に及ぶを以て大なりと為す」[37]とあるのは、当時の宗元の友人間にみられる、文に対する共通の態度とみてよいであろう。

註

(1) 答呉武陵論非国語（巻三十一）　(2) 守道論（巻三）　(3) 故唐給事中皇太子侍読陸交通先生墓表（巻九）
(4) 賀進士王参元失火書（巻三十三）　(5) 送辛生下第序略（巻二十三）　(6) 送辛殆庶下第遊南鄭序（巻二十三）
(7) 送寧国范明府詩序（巻二十二）　(8)(9) 祭李中丞文（巻四十）　(10) 与楊誨之第二書（巻三十三）　(11) 読韓愈所著毛穎伝後題（巻二十一）　(12) 種樹郭橐駝伝（巻十七）　(13) 梓人伝（巻十七）　(14) 答問（巻十五）
(15) 与楊誨之第二書（巻三十三）　(16) 与劉禹錫論周易九六書（巻三十一）　(17) 春秋集伝纂例序　(18) 与呂道州温論非国語書（巻三十一）　(19) 与楊誨之書（巻三十三）　(20) 道州毀鼻亭神記（巻二十八）　(21) 南嶽雲峯寺和尚碑（巻七）　(22) 唐故朝散大夫永州刺史崔公墓誌（巻九）
(23) 送濬上人帰淮南覲省序（巻二十五）「誨千生霊」とあり、またもう一つの用例には「始自生霊、及乎昆虫」（愈膏盲疾賦・巻二）とある。
(24) 春秋纂例（巻一）に「武王周公承殷之弊不得已而用之、周公既没莫知改作、故其頽弊甚於二代以至東周、王綱廃絶人倫大

壊、夫子傷之曰虞夏之道寡怨於民、殷周之道不勝其弊」とある。

(25) 封建論註に「按唐之藩鎮、初非有取干封建之制、特自天宝之後、安史乱定、君臣幸安、瓜分河北地以授叛将、護養孽萌、以成禍根、乱人乗之、遂擅署吏、以賦税自私、不朝献干庭、其与春秋所謂諸侯強而王室弱之患等、至元和間、為朝廷擾、無虚日、公目撃其禍之至此也、推原封建出干勢之不得已、而猶惜乎唐之不能悉置守宰、而使強藩悍将為中国擾也」とある。

(26) 治道一封建（朱子全書巻六十三）　(27)(29) 答貢士元公瑾論仕進書（巻三十四）　(28) 与楊誨之第二書（巻三十三）

(29) 与楊京兆憑書（巻三十）　(30)～(32) 答韋中立論師道書（巻三十四）　(33) 朱子全書巻六五論文　(34) 与友人論為文書（巻三十一）　(35) 与呂道州温論非国語書（巻三十一）　(36) 復杜温夫書（巻三十四）　(37) 唐故呂君集（劉夢得文集巻二十三）

五

王叔文、王伾の変は、これを扱ったと思われる唐代の実録が既に失せ、比較的詳細である『順宗実録』五巻についても、内容の改変がとかく問題になっている上に、通鑑にみられるように、嘗て詳、略二本が存在していたとすれば現行本も遽に全面的には信じ難いものになり、更に陳寅恪が「後来の閹寺深く外人の窺知を欲せず、所以に屢々此の禁中政変の史料の毀滅を図る」（唐代政治史論稿・九六頁）というような、積極的な湮滅意図が働いていたとすれば、真相の把握をいよいよ困難にする。ここでみようとする点は、宗元やその友人たちの、事件への参加の仕方が、従来いわれるように、単に王叔文一派に引きずられたものであるか否かを、その文を中心にして、その政治的実践の意義をみつつ、再検討しようとするのである。

先ず最初に、宗元に映じた王叔文についてであるが、触れられるところ極めて少なく、また直接その名を出さず、その上、王伾や韋執誼の記述が全くないことからすれば、恐らく政治的顧慮が加えられると共に、自省の意味もあっ

たものと思われる。その中で、その母劉氏誌文の中にある、叔文に関する主要な部分を列挙すれば、

堅明直亮、有文武之用。

貞元中、待詔禁中、以道合干儲后、凡十有八載、献可替否、有匡弼調護之勤。

公居禁中、訐謨定命、有扶翼経緯之績。

由蘇州司功参軍、為起居舎人翰林学士。

将明出納、有弥綸通変之労、副経邦阜財之職、加戸部侍郎。

重軽開塞、有和鈞粛給之効、内賛謨画、不廃其位。

凡執事十四旬有六日、利安之道、将施干人。

戸部之道聞干天下、為大僚。

用揚懿美、有其文武、弘我化理、天子是毗、邦人是望。

とある。

これが書かれた劉氏死去の時は、殆んどその直後が叔文の失脚の時機でもあり、その意味で筆者の宗元も頗る微妙な立場に立たされている上、元来叔文が主体になるべき文でないこともあってか、やや抑えた表現になっているが、「用」「勤」「績」「大僚」にも示されているように、それは主として政治的行為の外的叙述となり、宗元が好んで触れる、その理想や学問的背景などには、ほとんど言及されず、その表現にしても、宗元によくみられる、儒教的古典からの、時には羅列にも似た言葉の引用も殆んどみることがなく、そこには、一種の強力な行動派としての側面が浮彫にされているのである。しかし、これは誌文というような、いわば外的な文章であるので、宗元の王叔文観の一端が

示されるに過ぎないであろう。

元和四年、永州流謫後に、宗元は京兆許孟容からの書に対する返書を書き、その中で事件の経過を述べているが「此れ皆丈人の聞見せし所にして、敢て他人の為に道説せざるも、懐して已む能わず、復た簡牘に載す」[1]という個所をみれば、相手を信頼して、内心をかなり率直に吐露していることがわかる。その中で、次いで叔文のことに触れ、「宗元早歳罪を負える者と親しみ善し、始め其の能を奇とし、以て共に仁義を立て、教化を裨く可しと謂うも、過って自から料らず、懃懃勉励、唯中正信義を以て志と為し、堯舜孔子の道を興し元元を利安するを以て務と為す、愚陋、力彊すべからざるを知らず」というのである。ここでも確にその才能は高く評価され、しかも少なくとも当時に於ては、共に仁義を立てうる人物と認めたことは明らかであり、また利安[2]という、そのままでは古典には見られない新しい言葉が、王叔文と自分たちの行動に、それぞれ共通して使用されているところからすれば、叔文に対して、かなり積極的であることが充分にうかがえるのである。ただ、その能を奇とすという言葉には、その言外に、自分たちの資質とは異った面を叔文がもっていたことが含まれているように思われ、その意味では新唐書に伝えられている「毎に銭穀は国の大本なりと言う」（巻九十三）に示される財政的手腕などは、その方面での現実的な活躍と思い合せてみても、特殊な才能として、宗元の頭にあったものかも知れない。これは順宗実録をそのまま受けついだものであるが、通鑑にもみられる「譎詭多計」（徳宗・七月）や「頗る事に任じて自から許し……好んで事を言う」（順宗・二月）などを、道徳的評価と切離して考えれば、宗元自身もこういう一面を既に認めていたとみてもよいであろう。劉禹錫は、宗元たちが叔文に対し「其の能を言うに過ぎたり」[3]と寧ろ批判的であったが、長安、柳州時代を通じて、宗元には否定的言辞は勿論、本質的に批判的意見すら見当らないのである。

既にみたように、宗元はこの政治活動の中に堯舜孔子の道の実現を期したのであるが、これまでの多くの批判は、これを無視してきた。旧唐書には「逕く利を放たんとする者皆之に附し」（巻八五）とあるし、また韓愈も叔文に対しては極めて批判的であり、従ってこれと行動を共にする者に対しても「僥倖を欲し速進せんとする」[4]ことを参加の動機と認めようとしているが、確にこの事件に参加した一部のものは、宗元自からも指摘するように「射利求進者門に塡り戸を排す」[5]という行動がみられるので、これらに対しては韓愈の批判も妥当しようが、その成否すら不明の計画に対して、宗元程の者の友人たちが、最初から単純に栄進を求めて参加することは、その掲げられた理想からみても、ありえないであろう。それ故、もう少し事件の核心に入ってみよう。

通鑑によれば「叔文入りて翰林に至り、伾入りて忠柿院に至り、李忠言牛昭容を見事を計る、大抵叔文伾に依り、伾忠言に依り、忠言牛昭容に依り、転相交結、事毎に先ず翰林に下し、叔文をして可否せしめ、然る後中書に宜し、韋執誼承けて之を行う、外党則ち韓泰、柳宗元等、外事を采聴するを主とし、謀議唱和、日夜汲汲として狂するが如し、互相推奨し、伊と日い、周と日い、管と日い、葛と曰い、僩然自得し、謂く天下人無しと、栄辱進退、造次に生れ、惟其の欲する所、程式に拘らず、士大夫之を畏れ、道路目を以てす」（順宗・二月）とある。ここで明らかなことは、この政治活動は叔文を中心とするいわば内党と、「徳宗の末、叔文の党、多くは御史たり」（順宗・三月）とある、宗元及びその友人など、進士出身者を中核とする外党とに分れていることである。

王叔文、王伾については「初め翰林待詔王伾書を善くし、山陰の王叔文碁を善くす、倶に東宮に出入し、太子（註・順宗）に娯侍す、叔文……閒に乗じて、常に太子の為に民間の疾苦を言う」「伾寝陋にして呉語し、上の褻狎する所となる」（順宗・二月）とあるが、宦官、翰林学士などと共に、これら側近の人々は、専制君主制に於ける一種の盲

点として、君主に寄生しつつ、一方に於てはその権力を利用して、奇怪な勢力となりうることは、宦官の例で明らかであり、唐朝以来の翰林学士の、それに似た活動についても、既に多くの研究にみられる通りである。[6] 王叔文にとって、宦官はやがて当面の敵とみなされることになるが、眼前に展開されている彼等の勢力伸長の有様が強い刺戟となり、一種の手本を提供したことは、その執った手段からみて明らかである。

内党の一員で、形式的にはこの事件の主宰者として表面に立った韋執誼は、京兆の旧族であり、「幸に文芸を以て久しく任に従う」[7] にもあるように、わずか二十余歳にして翰林学士となって「早くより禁署に居」[8] る身であったが、「異相」[9] といわれる徳宗の寵愛から、やがて太子（順宗）ともよく、ある時太子が秘かに告げた「学士王叔文を知るか彼は偉才也」[10] という言葉がきっかけとなって、叔文と交を結ぶことになったといわれる。一方、叔文がこれと結んだのは「朋党を広める」[11] ためとあるが、執誼は内廷と親しい上に、科挙出身者にも友人が多く、唐書の諸伝から判断すれば、少なくとも陸質、劉禹錫、呂温などが王叔文と接近することになったのは、執誼を介してであると思われるので、叔文の見込みは予想通りであったといえよう。勿論「貪婪詭賊」[12] とまで評された執誼にしてみれば、それによって自己の勢力を確保しようとする計算もあったであろう。

また本来は反対側にある宦者の中からも李忠言が入り、順宗の愛人牛昭容とともに順宗の左右に侍せしめ、機密の保持に当らせた。このように表面上は執誼を相とし、実は叔文と王伾らが「翰林中に坐して」一切の政務を決していたが、始めそれを知る者もなかったといわれる。組織の形式的完璧さにも拘らず、内廷には、常にこのような、いわば一種の真空状態に似た個所が存在していた。それ故、君主の寵愛を後楯にして、この点を意識して、ここを拠点として積極的に事を計ろうとすれば、やがて意外な権力にまで発展する可能性が認められるのである。叔文はまさしく

ここに着目し、順宗の寵愛と病弱とを極度に利用して、次第に内廷内の権力を掌握しようと計ったのである。ただ、職掌の性質上からみて、一種の共通性の認められる翰林学士、執誼との結合は、確かにこの党の人材を豊富にはしたが、執誼にとっては却って、それが内部の発言力を強めもし、後に叔文との間は「遂に仇怨と成る」[13]程の破局状態に陥るのである。内党は最初から共通の地盤の上になく、これは、当初から既に予測されるものであった。

勿論叔文の目的は「国政を掌せんと欲す」（通鑑・永貞元年二月）ることであり、そのためには、内党の者を局面の展開に有利な、より枢要な地位につけることと、政治の具体的運営のためには、更に多くの人材を必要としたが、外党と称せられるのがそれに該当する。「藩鎮或いは陰に資幣を進め之と相結す」（通鑑・貞元十九年七月）と指摘されているのも、この計画の規模の大きさを思わせるものがあるのである。

通鑑には、韓泰と柳宗元とを外党側の主要人物として扱っているが、順宗実録ではこの外に、陸質、呂温、李景俠韓曄、陳諫、劉禹錫などを挙げ「……等十数人、定めて死交を為す」（巻五）とある。劉禹錫の自伝によれば、王叔文に対して「惟東平の呂温、隴西の李景俠、河東の柳宗元以て信を為す、然して三子は皆余と厚善、日夕其の能を言うに過ぐ」[14]とあり、この三人に、後に軍事力掌握の任を与えられる韓泰などが加わって、叔文との提携が主唱されたものと思われる。もっとも叔文自身は、李景俠と呂温に最も期待したといわれるが、[15]一見して分るように、ここに挙げられた人物の大部分は、古くからの親しい友人同士であり、宗元をも含めたこの一党が、外党の中核を形成したことは明らかである。「謀議唱和」というような状態が生れたのも、こういう背景から自然に理解できよう。

かつての宗元の友人の中には、韓愈や王涯、崔羣なども名を連ねていた。韓愈はこの事件当時陽山にあったが、宗元などへの個人的信とは別に、事件そのものに対しては、寧ろ外部の批判者となり、また王涯は当時翰林学士として、

鄭絪らと共に反対側に立っていた。そうすれば、これら古くから友人としての交わりは、事件とは直接には何の関係もなく、早くから成立していたことは明らかで、無論、王叔文の慫慂によって、新たに受動的に結成された政治的朋党ではないのである。ただ、宗元の古くからの友人の中に韋執誼の名前は見られないので、彼との交わりがどの程度であったかは不明であり、また、宗元の友人の中には、或いは古くから宗元以上に執誼と親しい者もありうるので、宗元を中心人物の一人とする友人グループが党的結合の状態で、全く主体的に、寧ろ積極的にこの事件に参加するという形式は恐らくとられなかったであろう。しかし、劉禹錫の文などから察すれば、これらの友人同志が集って王叔文評を語り合うような機会は、屢々あったものと考えられるので、この運動への参加にしても、最終的には個人個人が任意の形式をとり、従って時間的にもずれがあるままであるにしても、或る程度共通した主張が、諒解点に達し、意志の統一が行われて、始めて参加を決定したとみるのが当然であろう。稀代の策士である叔文ではあっても、内党の数は少ない上に、その結合には社会階層的地盤の共通性がなく、その弱点を強化するためにも、外党拡大を必要とすることは、恐らく叔文自身こそ最も痛感するところであったろうし、その点、共通の地盤の上に立ち、同じ科挙出身者という共通の意識によって結ばれている宗元たちに対して、よし速進を餌にして、勧誘と説得はなし得ても、それ程一方的に、強い態度はとりえよう筈がないのである。

その顔触れをみれば、そのいずれもが、それぞれに理想をもち、現状に激しい不満をもっと共に、革新に対する意欲も激しかった。それに加えて、名を求めようとする意図が強いことも、勿論、否定することはできないが、これはある意味では、官人たらんとする者の前提条件であろう。それに応ずるかのように、確かに彼等の昇進は早く、宗元にしても「然して僕当時年三十三にして甚だ少く、御史裏行より礼部員外郎を得、顕美を超取す」[16]という有様であっ

た。それが一党以外の求進者に「謗語転侈し、囂囂嗷嗷」たる反響をまき起し、彼等が次第に「怪民」となっていったことに対しては、宗元も「世の僕を怒るは宜也」と、その実状を率直に認めざるを得なかった。しかし冷静に当時を顧みても、宗元にとっては「辱は附会に在り」[17]というにとどまり、政治活動の目標に対する本質的な誤謬は、認める必要がなかったのである。ところがこれまでの、この事件への参加者に対する評価は、いわば周辺的問題に本質がすり代えられ、彼等の本質的な、政治的実践の動機は等閑に附せられてきたし、宋以後の現状維持的見解は、これを不義と断定せざるを得なかった。しかも、彼等を弁護する程の史料的裏づけも極めて乏しいのである。それ故ここでは韓愈のこの事件に対する特殊な立場を利用して、その著作の内的分析を通して、宗元とその仲間たちの行動について、もう少し立入った判断を下してみよう。

韓愈に触れようとすれば、それに先立ってこの事件の政治的、社会的意義を一応考える必要がある。宗元は徳宗、順宗、憲宗の三代に生きたが、この頃、君主専制権は次第に強化されつつも、その基礎は未だ確立されず、一方、安史の乱以後、急速に衰退に向った旧門閥の残存勢力に合せて、唐朝以来の、科挙出身の新興勢力の中で貴族化するものも次第に抬頭し、陳寅恪が「両種の新旧不同の士大夫階級は空間的にも時間的にも既に絶体隔離せず、自から伝染薫習の事無き能わず」[18]というようになった。彼等は元来社会的変化によって生じた、中小荘園所有者層を地盤とする者であるが、その中より上流に進出したものが、時の経過と共に、既に新興の貴族勢力として固定するまでになった。同じ科挙出身者の中でも、新興貴族にまでは至らない、中下級官僚層があり、宗元などの一党は大体に於て、ここに基礎を置き、共通の意識はこの上に立つことによって生じているのである。この二つの層は、地盤的には元来ほぼ同一であるが、次第に生じた政治的立場の相違から、利害的にも同一ではなく、従って、政治的に必ずしも同一歩調を

とることはできなかった。ただ後の、牛李の朋党上の争いというようなことになれば、門閥と科挙出身者としての大別の中には包含されることになる。

さらにこの外に、内廷に於て権勢をほしいままにしていた宦官の勢力も、軍事力との提携により実質的に一段と強化され、君主の廃立は、完全に彼等の手中に掌握されるに至った。

ただ、これらの諸勢力は決して単純に図式通りの対立関係にあったのではなく、相互に複雑な交流をもち、例えば名をうるためには有利な結合をも敢て望んだ元稹なども、はじめは宦官と抗争し、後にはこれと結ぶことによって宰相の地位を得た程である。そして、天子を頂点として、これらの諸勢力はいずれも決定的な権力を確立しえないままに、対立の中に一種の奇妙な均衡が保たれていたのである。その意味に於て、この時代はいわば相対主義の時代ということもできるであろう。後の宋朝に於ける社会的に安定している場合と異って、君主絶体制が確立されずにあったこの時代に、革新を目指すことは、結果は兎も角として、その政治的可能性は絶無ではなかったし、また次第に見られる時代の閉塞を打破しようとする企てが試みられるだけのエネルギーは、少くとも科挙出身の中級官僚の間には存在したのである。王叔文が内廷の特殊事情を利用し、この新興勢力と結んで、当面の目標として、実際的には宦官を政敵として挑んだこの事件は、それが失敗に終ったからといっても、全く一回限りの特殊なものとして終ったのではなく、条件が整えば、更に甘露ノ変などにも連なりうるのであり、(19) その意味で、道義的評価を離れて、この事件に対する正当な史的評価が加えられて然るべきであろう。従って、宗元などが結果的には見通しを誤ったとしても、所期の目的を具体的に達成することを期待することは、客観的にみて必ずしも無暴な不可能事であったとはいえないのである。事実、この事件の経過を辿ってみても、叔文は次第に財政的権限を手中に収め、更に辺境に於ける軍事力との提

携や、宦官勢力から軍事力を剝奪することも計画されたが、実現の寸前に至って宦官によって阻止された。軍事力の掌握こそ、この事件成功の鍵であっただけに、失敗の報を受けた叔文は「奈何せん奈何せん」[20]と絶望の嘆声を漏したといわれるが、宦官も事の重大性を認めて「其の謀に従えば、我が属必ず其の手に死せん」[21]と、その計画の危険性を指摘している。しかしこのような、実質的に宦官の権力を奪取しようとする闘争に対して、科挙出身の新興貴族や、宗元などと同じ階層に属する中級官人たちも、中にはその目的には賛意を表する者もあったが、王叔文を中心とするその政治活動には、根本的には「素卑賤を以て暴に起り事を領す、人信ぜざる所」[22]と宗元が適確に指摘するような政治的、社会的不信感から、結局、実際的には少しも同調者を得られず、軍事力掌握の失敗を機にして「末路孤危」[23]というような状態に陥り、事件は終結をみることになった。

宗元はこの事件に対して「年少気鋭にして幾微を識らず、当否を知らず、但一心に直遂せんと欲し、果は刑法に陥る、皆自から求めて之を取得せる所にして、又何ぞ怪しまん也」[24]と、終世一貫して変らない態度を持したが「叔文釁多し」[25]といわれるように、その性格から韋執誼ほどではなくとも、内部にも不満の者が多く、元来この団結は必ずしも強固ではなかったし、事件後になればそれは一層激しくなった。はじめ執誼に近く、そこから叔文に接触を持つに至ったと思われる劉禹錫なども、叔文に対し「実に治道を言うに工にして、能く口弁を以て人を移す」[26]と評し、この運動に対する自からの態度については「蓋し虚名を聞き唯職業を守る、実は朋附無し」[27]と弁解的言辞に終始するのである。この言葉は「蘇州謝上」という特殊な公的文章の中にあるので、無論これを以て直ちに禹錫の本心とするわけにはゆかないが、宗元のように、結局この事件に殉ずるような者は少なく、事が終れば人は夫々新しい途を求めるのに急であった。

韓愈はこの事件について、宗元のいう「もと卑賤」に応ずるかのように、本質的には「資を超え、序を超え」[28]という、儒教的秩序観に基ずく批判的見解を懐いたようであるが、叔文の当面の敵である宦者の代表的人物、倶文珍に近かったことも慎重な態度をとらしめた一因になったと思われ、陳寅恪をして「其の永貞内禅の事を述べるや頗る文珍等に袒す」といわしめたが、しかし、これに参加した宗元に対しては「前の時少年にして人の為に勇にして自から貴重顧藉せず、功業立ちどころに就く可しと謂う」[29]と、寧ろ頗る同情的であり、いま少しく自重ありせばと、これを悼み、偉大なる才能の、政治的には中道で空しくなすところなく終ったことを悲嘆するのである。そして特に、事件後の、劉禹錫に対する変らない友情に関しては「嗚呼士窮して乃ち節義を見る、今夫れ里巷に平居して相慕悦し、酒食遊戯して相徴逐し、詡詡強いて笑語し、以て相取り下り、手を握り肺肝を出して相示し、天日を指して涕泣し、生死相背負せざるを誓う、真に信ず可きが若し、一旦小利害の僅かに毛髪の比の如きに臨めば、反眼相識らざるが若く、陥穽に落つるも一たびも手を引いて救わず、反って之を擠し又石を下す者皆是れ也、是れ宜しく禽獣夷狄も為すに忍びざる所なるべし、而して其人自ら視て以て計を得たりと為す、子厚の風を聞かば、亦以て少しく愧ず可し」[30]という讃辞を惜しまないである。この文はその書き方に一種熱のこもっているところからすれば、――また、例えば順宗実録の死交と、ここに見える生死を誓うの相通ずる点など――単に世相一般をいうよりも、一党の者に対する痛烈な批判をも含めたものに相違なく、それはまた逆にいえば、宗元に対する深い信に連なってくるのである。

宗元もこの韓愈に対しては、終世一種の対立意識をもってこれに臨み「退之の才の若きは、僕を過ぐること数等」[31]と、人物、文章、思想の点で極めて高く評価していたし、互いに朋党という関係にはならなかったが、ある意味では同志の誰よりも認めていたといえるのである。そして、両者の交友圏には重なる面が多く、例えば独孤申叔に対する

哀辞や、事件に連坐したため、八司馬の一人として流謫された韓泰のために「挙韓泰自代状」（巻三十九）を書き、その中で「詞学優長、才器端実」と称賛するのを惜しまなかったし、陸淳に対しても「学を積み文に懿く、経を守りて古に拠る、夙夜講習、庶く中に協う」[32]と、その学問に敬意を払うのである。通鑑や新唐書にみえる陸淳（質）は、学問については全く触れられず、しかも「韋執誼自ら専権を以て太子の悦ばざるを恐る、故に質を以て侍読と為し、潛に太子の意を伺い、且つ之を解かしむ、質言を発するに及び、太子怒りて曰く、陛下先生をして寡人の為に経義を講ぜしむる耳、何為れぞ他事に預らんや、質惶懼して出ず」（永貞元年四月）という扱い方であり、個人の教養よりも、敵対する両者間の緊迫状態を生々しく写している点で、確に司馬光の史的眼光の冴えが伺えるが、韓愈の方が陸淳に対して、より同情的であることは疑を容れないところである。つまり韓愈は、事件そのものには批判的であり、また個人としても、順宗実録に従えば、内党ともいうべき、王叔文、王伾、韋執誼などには極めて厳しかったけれども、宗元をはじめとして、参加者のうち、いわば外党に属する者とは元来階層的にも、ほぼ同じであり、従って意識の上でも、政策の上でも比較的近く、――その速進に対してこそ批判的であったが――その中の多くの者の、人物をはじめ学識や才能をも充分認めていたということができよう。

既に触れたように、韓愈の順宗実録現存本には種々の問題があり、これをもって当時を解明する唯一の手がかりとすることは危険であるが、詩をはじめとして、韓愈のほかの材料からみて、この事件に対する批判的態度の点では現存本実録の記述はさしたる改変は加えられていないように思われる。そういう一貫した批判的筆致の中にあって、奇異に感ぜられるのが、順宗即位直後の政策に対する、積極的にこれを肯定した扱い方である。

通鑑ではこの点を「貞元の末、政事人の患となる者、宮市五坊の類の如き、悉く之を罷む」と簡潔に述べ、次いで

五坊の小児のことに触れるに止まる。そして司馬光の史眼からすれば、政局の大勢からみて、これはさして重大事ではなく、また、王叔文の政治の特徴というよりも、「上東宮に在りて皆其の弊を知る。故に位に即くや首に之を禁ず」（永貞元年二月）と、その功を順宗に帰せしめようとするかにみえる。しかるに、実録では、宮市、五坊の小児のこと、後宮より三百人を解放することや、更に、塩鉄使の進献を停めしめることなどが、叔文の政治内容として、比較的詳細に述べられている。宮市については、順宗が皇太子時代、叔文などをも交えた会合で批判的に討論したことがあり、[33] その機会に叔文は順宗に近ずくことになったと伝えられ、また韓愈も貞元十九年にその弊を論じ、そのために山陽令に貶せられているので、その意味からも深い関心が寄せられてもいようが、それらの記述の終りに「人情大いに悦ぶ」[34] とか「百姓相聚りて讙呼して大いに喜ぶ」「士君子之を惜む」[35] などという言葉が書き加えられ、また、流謫中の忠州別駕陸贄と道州刺史陽域とが、帰任の恩典をまたずに任地で歿したので、それぞれ兵部尚書、左常侍が贈られたことに触れては、この尊敬する二先輩を悼むかのように閲歴を詳細に述べ、且つ追贈の処置に暗に賛意を表明する。一体、叔文の政務担当期間は極めて短期で終り、その政策の性格を全体的に見極めることはできないが、韓愈は事件そのものに対しては頗る批判的でありながら、現実に示された、その手始めともいうべき改革の一端に対しては、何の躊躇もなくこれを是認し、寧ろ善政として、これを積極的に記述するのである。無論、これらは当時の人々が均しく望んだことであり、これを善政とすることは決して不当ではなく、また韓愈も既に「上春宮に在りし時其の弊を知る」（巻三）とあるように、これを大患以前の若い皇太子（順宗）の聡明と結びつけている一面も考えうるが、実録の関連記事を見てもわかるように、「其の弊」の内容は、決して当時の弊政のすべてを指しているのではない。そうすれば、韓愈が善政として記述している諸政は、実質的には王叔文らの責任に於て実施されていることを、ほかならぬ韓愈自

からが認めていることは疑う余地がないであろう。

新唐書によれば、王叔文は宗元に対し「大いに進用せんと欲す」（巻九十三）とあり、また劉禹錫については「宰相の器有り」（同）といっているが、朝廷の大義に際しては「秘策は多く叔文に出で、禹錫及び柳宗元を引きて与に議す」（同）とあるように、重要政務に関して、この両者の意見が反映していることを示している。これは既に述べた、通鑑の「外党則ち韓泰柳宗元等外事を采聴するを主とす」にも照応するものであるが、韓愈にとって、政治的動きの周辺に浮動する俗人を除いて、中枢部に参画する主要人物は、その殆んどが親しく、また尊敬に価いする友であった。事件への参加に対してこそ批判的であっても、各個人に対する評価には変りがない。その旧友が「懃懃勉励」して、主として担当する政策であるならば、大過があろう筈がなく、また実際に自分としても改められることを、かって上書までして要望したものが、逐次実施されようとしている。そういう、友への信に基く親近性と安心感なるものが、それのみでは、史的評価を下すには未だ不確定な、手始めに過ぎない政策に対する、積極的肯定の背景に存することを否定することはできないであろう。韓愈すらこういう認識をもつとすれば、宗元たちにしても、名を求めることに就いては、叔文に操られた者が中枢部の人にもあることは、否定することはできないにしても、宦官を中心とする祓政に対する、改革後に於ける、政策面の担当という任務の自覚をもって、事の成否に対しても、時代全体からみて、ある程度の希望を懐きつつ、目標の実現を期して、主体的に運動に参加したものと解してよいであろう。

ここにつけ加えて置きたいのは韓愈のいう「速進者」についてである。この事件に便乗して、速進を計ろうとする者のあることは、別に怪しむに足りないし、ここでは一応問題外とするが、韓愈は、陸質、呂温、李景儉、韓曄、韓泰、陳諫、劉禹錫、柳宗元などという中枢的人物に対しても、そうきめつけているのである。新唐書の程异伝の賛に、

叔文を「沾沾たる小人」（列伝巻九十三）といい、また「宗元等節を撓め之に従い幸を一時に徼む」（巻九三）とあるのも、ほぼ同趣旨とみてよいであろう。しかし、これらの友人が永年に亘って学び得た理想を実現しようとして、事件に参加しているその気持は、その政策にあれだけ賛意を表している以上、韓愈とて全く知らぬ筈はない。その意味で、便乗者と一応区別し、しかも尚そう呼んでいるものと解してもよいであろう。

これは永州流謫後のことであるが、宗元は「往事の咎を追い計り、日夜反覆」[36]して、その結果「是の如きは、豈少しく名誉を好むを以て、味を嗜み毒を得、是に至るにあらざらん耶」と、内心に栄達の動機のあることを認め、また別に「凡そ人皆自から達せんと欲す、僕先ず顕処を得、才同列を踰える能わず、声当世を圧する能わず、世の僕を怒るは宜也」[37]と、御史裏行から礼部員外郎に「超えて顕美を取」ったことが、他人の栄達心を刺戟し、世のそしりを招いたことを率直に認めている。確にここに参加した者は次々と昇進していることは、「其の交結する所、相次で抜擢し、一日に数人を除するに至る」[38]といい、通鑑にあるように、それが「惟だ欲す所、程式に拘らず」という状態であったことも恐らく事実であろう。また同士の間に於ても、特に「簡倨自高」[39]な韓皐は、彼等の栄進を嫉んで「吾れ新貴人に事うる能わず」[40]として去ったという事態も起っている。

宗元がいうように、栄達を望むことは、およそ科挙出身者であれば何人も自認せざるを得ないところであり、そういう熱望は韓愈自身の文中にも到る処に見出すことができる。宗元はまた「孔子名誉を避けずして以て其の道を致す」[41]ともいっているが、これは恐らく士大夫たる者に共通する本心であり、また一種の理想であるともいえよう。

こう考えてくると、韓愈が特に速進者という言葉を使用したのは、それを事件への参加の主たる動機と見做したわけではなく、宗元も「伏して自から思念するに、過大の恩甚しく、乃ち以て此を致す」[42]というように、一定の程式に

拘らない昇進が、余りにも多く眼前に行われていることに対する怒りと、韓愈すらまぬがれなかった嫉妬とが、主たる原因のように思われる。そしてその眼を以て加担者をみれば、節を撓めて叔文に従っているように映ずるのは、蓋し自然のことであろう。特に事件当時、韓愈は地方にあって不振にあえいでいた時でもあったが、その詩をみれば、この事件を驚く程早く知り、これに対する感慨を詩にしていることからすれば、韓愈自身も確に、平静な態度を持することができず、また異常な関心を示していたことは疑をいれない。都にいてこの事件を直接見聞するのとは違って一方的な抽象化された、いわゆる速進者の――例えば宗元が「羣比以て名を為す」[43]と吐き出すように言っている手合――行動ばかりが誇大に報道されて、その耳に入ったことも当然想像でき、それが強く韓愈を刺戟したとすれば、そういう体験が後年の実録編纂のときに、ある程度主観的判断に影響を与えたとみることはできないであろうか。いずれにしても、この言葉は多分に主観的要素の加味されたものであることは疑う余地がないし、参加者の行動をその根本動機に於て徹鑑したというよりも、単に表面的に捉えた俗論と、それ程撰ぶところがないのである。

この事件に関連して、もう一つ触れておきたいのは「乞巧文」や「罵尸虫文」などと一連の、「宥蝮蛇文」についてである。

宗元は恐らく政治的顧慮からであろうが、永州流謫後も正面からこの事件の正当性などを弁明したりはしないが、屢々述べたように、本質的には最後までこの事件の正当性を信じていた。しかし、いまは正しいものを正面からは正しいといえない、そういう内心の一種の抑圧が、一連の比喩的に特殊な文を創造せしめたものと思われる。そしてこの「宥蝮蛇文」は、この事件が宗元に与えた影響を象徴的に示すものと思われるので、ここで挙げておこう。宗元は「人を犯せば、死するか不治」かといわれる蝮に自からをなぞらえて、蝮の立場を自己の立場としつつ、しかも、一

方それを否定する立場との両側面を内に蔵し、自己をいとほしむと同時に、時代批判を行おうとするのである。

先ず蛇取りの上手な家僮が蝮を取ってきたことから、二人の問答文は始まり、榛の中にいる蝮の方は人に対して「彼汝に即ずかざるに、汝彼に即ずき、犯して死を闘わし以て執う」にみられるように、何もしないのに人間側の始動によりこれを執えて殺すのは、「汝益ます暴なり」といわねばならない、という考え方が展開される。蝮の形は甚だ「怪僻」であっても、それは造物主が与えたものであって、蝮は「楽んで此の態を為すに非ず……是を為さざらんと欲すと雖も得べからず」なのである。蝮がこういう形を与えられていることは寧ろ「是れ独り悲憐すべきものにして、又執か能く罪しこれに怒を加えんや、汝殺す勿れ、余其の已むを得ずして是の若きを為す所を悲しむ」と、寧ろ蝮の立場に自からを下し、自分の体験をここに封じ込めて、悲嘆するのである。

勿論蝮はただ静かにしているわけではない。しかしそれは「惟汝の実は陰陽の戻るが為にして、汝の忿疾を仮る」ことが原因であるとしつつ、そこから生じた蝮の形姿、性情が生生しく画かれるが、それは「吾れ夫の天の汝の軀を形ちづけしを悲しむ翼を絶ち足を去り、無以て自扶せんとす、脊を曲げ脅を屈し、惟れ行くこと紆にして、目は蜂蠆を兼ね、色は泥塗に混じ、其の頸蹙恧、其の腹次旦す、褰る鼻鉤れる牙、穴より出でて榛に居り、怒を蓄えて蟠り、毒を銜みて趨き、志物を害せんと靳む、陰に妬み潜に狙う、汝が禀受是の如し、黿となり螾とならんと欲すと雖も焉ぞ已むことを得可けんや、凡そ汝の悪を為すや、此れを楽しむに非ず、形に縁り性と役し、自から止むべからず草揺れ風動き、百毒斉しく起れば、首拳背努し、舌を呷み尾を揺がし、其の凶を逞さざれば、己を病むが若く、世皆寒心するも、我れ独り爾を悲しむ」とやむを得ざる蝮の本性を、ここでも再び悲しむが、蝮に対して、これ程身近な言葉が綿々と述べられ、しかも「悲」という言葉が繰返し述べられている点など、そこに自己の悲嘆がこめられている

みるのが至当であろう。しかし、ついで今度は一度立場を変えて、そういう悪の発生を防止するかのような見解が述べられ「吾れ将に吾が庭を薙ぎ、吾が楹を葺き吾が垣を窖(みつ)にし、吾が扃(もん)を厳にし、奥草を植えしめず、穴隙を萠(しょう)ぜず、汝と途を異にし、相交争せず、汝の悪と雖も焉んぞ得て行われん」それ故「汝を野に宥し、自から求めて吉に終らしめん」と、現状に対する批判的言辞を述べ、また再び蝮の立場に思いをはせ「他人は心を異にし、誰か汝の罪を釈さん、形既に化せず、中焉ぞ能く悔まん、嗚呼悲しいかな」「今は寛なりと雖も、後には則ち誰か賚(あた)えん、陰陽爾り、造花爾り、道烏にか在る、悲しまざるべけんや」と、自己を再び蝮の立場に置いて、その運命を憐れみ、その救いのないことを悲しみつつ筆をおくのである。つまり、人と蝮との交流の中に、自己の複雑な立場を象徴化し、革新への止むをえざる情熱、その必要、そして為政者の無能や、さらに自分の前途や運命に対する不安などが、こめ尽されているのを知るのである。

そして、この蝮の立場に自己の立場が転換されていることころに、これまでの長安時代に於ける、生民(人)のためという思想にみられる上下的意識は大きく変化し、為政者としての立場と、下にある、多くの場合は被害者的立場に追いやられることの甚だ多い立場とを、二つながら意識のうちにもつという、流謫人柳宗元の見方が、ここに既に成立したことは、極めて意味深いことといわなくてはならない。永州時代に於ける人間尊重や、見捨てられたものに対する溢れるばかりの同感的発言は、このようにして、王叔文の事件によって生じた、自己の被害者としての立場や心理と、それに基く厳しい社会の階層的現実認識なくしてはあり得なかったと思われるのである。社会の上層に立つべかりし官人柳宗元は、ここに至ってようやく、階層的制約を超えて、裸の人間を見出そうとするのである。

註

（1）寄許京兆孟容書（巻三十）
（2）宗元が高度な人間的行為を表現する場合は、殆んど例外なく経書に基くか、それをふまえていることを暗示するような表現をとる。この「利安」にしても、この熟し方は古典にはみられないが、「利天下」（易・乾）や「在安民」（書・皐陶謨）などが背景に考えられているのはいうまでもないことである。
（3）劉夢得文集（外巻九）　（4）順宗実録（巻五）　（5）（1）に同じ。
（6）山本隆義「唐宋時代に於ける翰林学士について」（「東方学」四輯）
（7）（8）貶韋執誼崖州司馬制（全唐文巻五十六）　（9）（10）旧唐書列伝第八十五・韋執誼　（11）順宗実録（巻一）
（12）順宗実録（巻五）　（13）順宗実録（巻五）　（14）子劉子自伝（劉夢得文集・外巻九）　（15）順宗実録（巻五）
（16）（17）与蕭翰林俛書（巻三十）
（18）陳寅恪『唐代政治史述論稿』（八十一頁）　（19）韓国磐『隋唐五代史綱』（二六〇頁）
（20）（21）通鑑・順宗永貞元年六月　（22）～（24）宰許京兆孟容書（巻三十）　（25）新唐書巻八十三、韋皐伝　（26）劉夢得文集巻九　（27）蘇州謝上（劉夢得文集巻十九）　（28）永貞行（韓昌黎文集・巻三）　（29）（30）柳子厚墓誌銘（韓昌黎文集・巻三十二）　（31）答韋珩示韓愈相推以文墨事書（巻三十四）　（32）順宗実録（巻三）　（33）順宗実録（巻一）
（34）（35）順宗実録（巻二）　（36）送従弟謀帰江陵序（巻二十四）　（37）与蕭翰林俛書（巻三十）　（38）順宗実録（巻五）
（39）（40）同（巻三）　（41）送韋七秀才下第求益友序（巻二十三）　（42）与蕭翰林俛書（巻三十）　（43）対賀者（巻十四）

六

王叔文の事件は失敗に終り、貞元二十一年九月、宗元は韓泰、韓曄、劉禹錫などと共に貶せられ、邵州刺史となったが、まだ任地に至らないうちに、刺史は罪としては軽きに失するとして、再び貶せられ永州司馬となった。この時には韋執誼、陳諫、凌準、程异の四人も加えられたが、八人はいずれも司馬として、地方に流謫された。翌年は憲宗

の元和元年にあたり、正月には改元の大赦が行われたが、彼等は一種の政治犯として扱われ「量移の限りに在らず」（旧唐書巻十四）として、その対象から除外されている。これから、十年の永きに亘る永州時代が始まる。その後、一旦都へ召還されるが、その直後、期待に反して再び柳州刺史に任ぜられ、そこでの五年間がこれに続き、この事件以後、実に十五年間流謫の苦汁を味わって、四十七歳の十一月に柳州の地で歿した。

以後は時期的には永州時代になるが、宗元はこの事件に対して、無論罪の意識をもち、それが絶えず宗元を苦しめてはいるが、しかし、それは事件の本質的正当性を否定するものではなく、従ってその所罰も「昧昧の罪」[1]でしかなかった。正しいと信じたことを行ったのにも拘らず、予想を遙かに超えて、非本質的な点での波紋はすさまじい勢いを以て渦巻き、宗元に迫った。宗元はそういう俗悪なものに対して「其の正を秉りて以て世に抗するに、世必ず敵讎となるは何ぞや、善人少なく、善ならざる人多ければなり」[2]と断定して憚らなかったが、同時に、当然起る筈の「喜怒を窮めず、曲直を究めず羅に衝り、穽に陥り、顚踣を知らず、愚惷狂悖、是の若く甚し」[3]というような、連鎖反応式に拡大される悪質の反響を見通せなかった一種の甘さを「周慎に闕く」[4]と自己の責任に於て、その罪を意識し、「展転歔欷」[5]して、すべての反省をそこに集中させるのである。宗元はかって懼について言及し「禍至って後に懼れる」[6]のは懼れをまだ知らないのであり「君子の懼は未だ始まらざるに懼る……起きて禍を獲るは君子恥とせず」というのであるが、この考え方からすれば、未始の懼れが充分でなかったということになるであろうか。そして、その激しい苦悩の中に、文人柳宗元の純粋さがうかがわれる。純粋なるが故に、怒りと悲しみも亦深く「残魂を踊躍し、蓄念を奮揚せしめ、激しては死灰の気を以て、其の弊箒の辞を陳ぶ」[7]という有様であった。

既に述べたように、長安時代の宗元の生活は政治家としてのそれに終始した。そして永州、柳州と十年に亘る流謫

時代にも、本質的には隠遁思想に逃れ去ることはできなかった。これは稀有のことであり、いわばその信奉する聖賢の道に殉じたことにもなるが、しかし、それは韓愈の儒教とは大きく相違している。儒者韓愈は「原道」を唱道して、仏教を始め、他の一切の思想を異端として排撃したために、元来内面性に乏しい儒教に、自己の全的支持を仰がなければならなかった。それは確に宋学の失蹤としての道を開いたかも知れないが、それ故にまた、人間韓愈の儒教への喘ぎは覆うべくもないのである。

われわれは宗元から、仏骨を論ずる表のような勇壮な言葉を期待することはできないが、同時に、儒教に対するたゆたいもみない。長安時代の政治的活動の原動力を、古典に於ける合理性に求めた宗元は、政界から追放されて永州に去り、より純粋な立場から儒教に於ける非合理な要素を除去し、それはより明澄な、そして人間の信頼を根柢に置く「天説」に結実した。勿論それは、最終的に非合理なものをも認めようとする韓愈に対する反論でもあった。そしてその思索は、更にまた「天対」のような思想にも達するのである。

しかし宗元にとって、聖賢の道は「理道」としては唯一のものであっても、内面の道としては必ずしも唯一のものではなかった。そこに人間的拡充や安心を願う宗元の多方面への探究の意味があり、そういう一面はやがて、「永州八記」に於て見事な開花をみるのである。八記については、後述するが、それは勿論、単なる叙景文ではない。いまいわば形成期の長安時代に於て、この面の萌芽がどのように認められるかを少しく考察してみよう。

宗元は晩年、恐らく柳州の頃の作と思われる「送僧浩初序」の中で、浮図の道に触れ、自分が仏教に接近するのを批判する韓愈に対して「退之其の外に忿りて其の中を遺す」[8]と評しつつ、二つのものを仏教から得ようとする態度を明らかにしている。その一つは「浮図誠に斥す可からざる者有り、往往易論語と合す、誠に之を楽しむに、其の性情

に於て爽然として、孔子と道を異にせず……聖人復た生ると雖も得て斥くべからず[9]」という思想的な観点に立つものと、もう一つは、「凡そ其の道たるや、官を愛さず、能を争わず、山水を楽しみ、閑安を嗜む者多きと為す、吾れ世の逐逐然として唯印組するを務と為し以て相軋るを病む也」「吾の浮図と遊ぶを好むは此を以てす、今浩初其の性閑にして、其の情に安んじ、其の書を読みては易論語に通ず、唯山水の楽、文有ればこれを文にし、又父子咸其の道を為し、養を以て居り、泊焉として求むる無し[10]」という、生活態度としての一面とである。晩年の考えとしては無論極めて自然と思われるが、しかしこれと同じような考え方は永州のものにもみえる。宗元の一族に文郁師なるものがあって、はじめ儒であったが、後釈に入り、独り山水の間をゆき、宗元の疑問に対して「力奔競に任ぜず、志煩拏に任ぜず、苟も其の好む所を以て、行きて之を好むのみ、終に変化すべからず[11]」と答えたという。宗元はこれに対して「吾れ当世文儒を以て名声を取り顕官と為る、朝に入りて憎娼訕黜を受け、摧伏して其の土を守るを得ざる者、十のうち恒に八九なるを思う、師の若きは、其れ訕し黜す可けん耶、是を用て復た其の行を譏らず、返りて退いて自譏す」とし、必ずしも積極的とはいい難いが、文郁師の生き方をある程度肯定せざるを得なかった。

またこれは禅思想になるが、宗元は当時の一般的傾向に対して「妄りに空語を取る」「能く言う有れども体して用うるに及ばず[12]」などと評するのであるが、琛上人に対しては「仏の大にして法の広たるを知る[13]」と仏教に対して内的な理解を示し、また増上慢という言葉をも使って「吾れ世の傲逸者の彼を嗜みて此を求めざるを病む[14]」とすら言うに至っているのである。

しかしながら、宗元の仏教に対する内的接近の仕方は、流謫などに示される不遇、失意の時代になって始めて求められたものではなく、既に長安時代にもみられるのである。「吾れ幼少より仏を好み、其の道を求めて三十年を積み

ぬ[15]」という言葉はそれを示すのであるが、この立場からすれば、科挙を目的とする文章の修業のごときも、確に「博奕の雄[16]」に過ぎないものであった。宗元自身、勿論科挙への努力を惜しまなかったけれども、それと同時に「世に制せら[17]」れる意味に於て、その空しさをも充分味わっていた筈である。そして、こういう人間的努力に対する空しい否定的言葉は、仏教や諸子の思想によっては導かれたものといえよう。

そこで、長安時代に於ける仏教への対処の仕方をもう少しみよう。宗元が仏教をみるとき、思想的にはつねに儒教との関連が考えられるが、これは仏教に限らず、例えば「余老子を観るに亦孔子の異流也、以て相抗するを得ず[18]」とし「然して皆以て世を佐くもの有り[19]」というように、これを異端として退けずに、寧ろ儒教の中に吸収しようとすることは、また「博なること荘周の如く[20]」などにも示されている。勿論、宗元は博大な思想的綜合を成し遂げて、独自の思想構成をなしてはいないが、儒教を中核として、広く諸思想の内に入ろうとする柔軟な思想的態度をもっていたのである。これは仏教に対しても同様であった。但し、徒に仏教に近ずいて「至虚の極を言えば、則ち蕩にして守を失す[21]」ることを戒しめはするが、「儒に由りて通ずる者[22]」のあることを認めて、その態度を肯定し、また文暢上人に対しては「儒釈を統合[23]」しようとする者として、これを高く評価するのである。

文暢上人の遊を送る文は韓愈もこれを書いているが、宗元のものは貞元十九年春のことで、三十一歳のものである。長安時代のことであるのはいうまでもない。そしてこれは晩年のものと同じく、生き方から更に文学との結びつきに迄言及している点で、極めて注目すべきものを含んでいるのである。

永州の詩に「詎ぞ夷巣に肩ぶを欲せん[24]」とあるように、宗元はただ一切を放擲して隠遁し、ひたすら山水の美に没入することはできなかったが、六朝以来の釈と文学の交わりには深い関心を示して「昔の桑門の上首、好んで賢士大

夫と游ぶ、晉宋以来道林、遠法師（慧遠）、休上人（恵休）其の与に游ぶ所は則ち謝安石、王逸小習鑿齒、謝靈運、鮑照の徒皆時の選なり、是に由りて真乗法印儒典と並用し、人嚮う方を知る」[25]といい、さらに「吾輩常に霊運明遠の文雅を希い」と続けているところからみれば、長安に於ける政治活動の中に於ても、宗元が六朝文学に深い関心を注いでいたことを知ることができるのである。韓愈が主として達意に重点を置く、古文からの系統を直線的に引継いでいるのに対して、宗元が儒教の古典を尊重しつつ、一方に於てその内面的充実を計る努力をし、その一端として、六朝文学にも美を見出していることは、晉魏の書を愛好したことなどをも考え合せて[26]、その趣向からして極めて興味深いことであり、しかもそれは一時的の、いわば萌芽的なもので終ることなく、永州の流謫時代にさらに著しい発展を示すのである。

ついでながら、長安と永州との連続性について思想面から触れれば、確かに両時代間には環境上の変化という点では著しいものがあるが、思想的にみれば、流謫によって、その直後から本質的な変化はみられず、寧ろ永州時代は長安の延長というようにして始められている。

例えば『非国語』は確かに永州時代の作ではあるが、親友呂温への手紙には「然して常に言を立て文に垂れんと欲するも、則ち恐れて敢てせず、今動作悖謬、以て世に僇を為し、身夷人に編せられ、名囚籍に列し、道の窮を以てする也、而して事を施すに日無し、故に乃ち挽引し、強いて小書を為り、以て中の得る所を志す」[27]にみえるように、呂温などと共に長安時代に学び得た思想を閑暇を得て、漸く著作にしようと意図したものであって、勿論永州時代の体験による深化はありえようが、本質的な変化はみられないようであるし、その点は「貞符」などにしても「臣尚郎たりし時、嘗て貞符を著す（中略）会貶逐せられ中ほどにして輟み、克く備に究めず」[28]にもあるように、長安時代に果

しえなかったものを、永州時代に継承して完成しようと目指しているのをみることができる。

これは文章や文学関係についてもいえることであるが、宗元は永州流謫後三年を経過し、元和四年、三十七歳になると、精神生活もようやく安定し「戦悸稍定まる」[29]といい、また「僕近く亦作文を好み、京城に在る時と頗る異る」[30]と自己の文体上の変化を認めているが、それは「百家の書を読み、上下を馳騁し、乃ち少しく文章の利病を知るを得たり」[31]や「矻矻として自から苦し」[32]んだその結果が、次第に具体的な形ちをとって表現されるようになったのであろう。しかも、それと時を同じくして、文章について論ずる中で特に六朝時代の陸機、潘岳に触れ、それを顧る者の少ないことを嘆じつつ「若し皆之を為して已まざれば、則ち文章の大いに盛なること、古より未だ有らざるなり」[33]というのである。宗元はこの外にも唐代の陳子昂や張九齢などをも挙げているので、単に六朝文学のみに注目しているわけではないが、長安時代に於ける謝霊運から更に遡って陸機、潘岳にまで及び、六朝文学に、文学に於ける一つの大きな主脈を認めようとしていることは疑いもないことであり、特にこれらの文人は、文章は文理と修辞とを兼ねそなえることを力説し、漢・魏の文理尊重から六朝の修辞尊重への過渡的思想を示しているとすれば、[34]韓愈の系統とは異なる文学のとらえ方として、長安時代の捉え方が一段と発展したものとみてよいであろう。

宗元は文章の陥り易い点として、自からの経験を述べ「凡そ人辞を好くし書を工にす、皆病癖也、吾れ不幸にして蚤に二病を得、道を学びて以来、日に砭鍼攻熨を思えども卒に去る能わず、心腑を纏結して牢甚、斯須も之を忘れんと願うも克たず、竊に嘗て自から毒る」[35]と、切実にその弊害を述べるのであるが、いまここに、六朝の文学に文章に於ける一典型をみようとしたとすれば、それは六朝文学に於ける装飾性を否定し、その毒を克服した上での発言であることはいうまでもないであろう。とすれば、古典に於ける簡古な文体を学び、思想内容を摂取してその内部を充実

させた宗元が、その上になお陸機、潘岳のような代表的六朝文学に一つの典型を求めたわけであり、それは内的律動の表現として、止むを得ざる欲求であるとみなす外はないであろう。そうすれば、韓愈に勝るとも劣らぬ内容の高さをもつ宗元に、韓愈の古文とは異なる、寧ろ六朝的形式を欲求する衝動のあることの表われとして、極めて意味深く受け取る必要がありはすまいか。流謫後の三年間は、詩に於ても文に於ても余りみるべきものはない。それが、三十七歳頃より内部の回復が除々にみられ、再び活潑な文学的活動が始まる。「永州八記」のごときものも次々と生れ、しかもその頃から、自からも文が変ったという自覚をもつに至っているのである。これらを考えれば、内部に昂揚された律動は、詩の世界のみでなく、文の世界に於ても、つまり思索的表現すら、必然的に一種の形式を求める運命をもつことを、柳宗元は暗示するかに見えるのである。

（一九六三年二月十四日稿）

註

（1）（2）与楊誨之書（巻三十三）　（3）答問（巻十五）　（4）上嶺南鄭相公献所著文啓（巻三十六）　（5）謝襄陽李夷簡尚書委曲撫問啓（巻三十五）　（6）誡懼箴（巻十九）　（7）謝李吉甫相公示手札啓（巻三十六）　（8）～（10）送僧浩初序（巻二十五）　（11）送文郁師序（巻二十五）　（12）～（14）送琛上人南遊序（巻二十五）　（15）送巽上人赴中丞叔父召序（巻二十五）　（16）答呉武陵論非国語書（巻三十一）　（17）送玄挙帰幽泉寺序（巻二十五）　（18）（19）送元十八山人南遊序（巻二十五）　（20）与楊京兆憑書（巻三十）　（21）（22）送巽上人赴中丞叔父召序（巻二十五）　（23）（25）送文暢上人登五台遂遊河朔序（巻二十五）　（24）遊朝陽巖遂登西亭二十韻（巻四十三）

（26）「僕蚤に古書を観るを好み、家に蓄うる所の晉魏の時の尺牘甚だ具わる、又二十年来、徧に長安の貴人の事を好む者の蓄うる所を観、殆んど遺す無し」（与呂恭論墓中石書書・巻三十一）

（27）与呂道州温論非国語書（巻三十一）　（28）貞符（巻一）　（29）与李翰林建書（巻三十）　（30）賀進士王参元失火書（巻三十三）　（31）～（33）与楊京兆憑書（巻三十）　（34）倉石武四郎「中国文学史」（三八頁）尚、潘岳については高橋和巳「潘岳論」（中国文学報7）がある。　（35）報崔黯秀才論為文書（巻三十四）